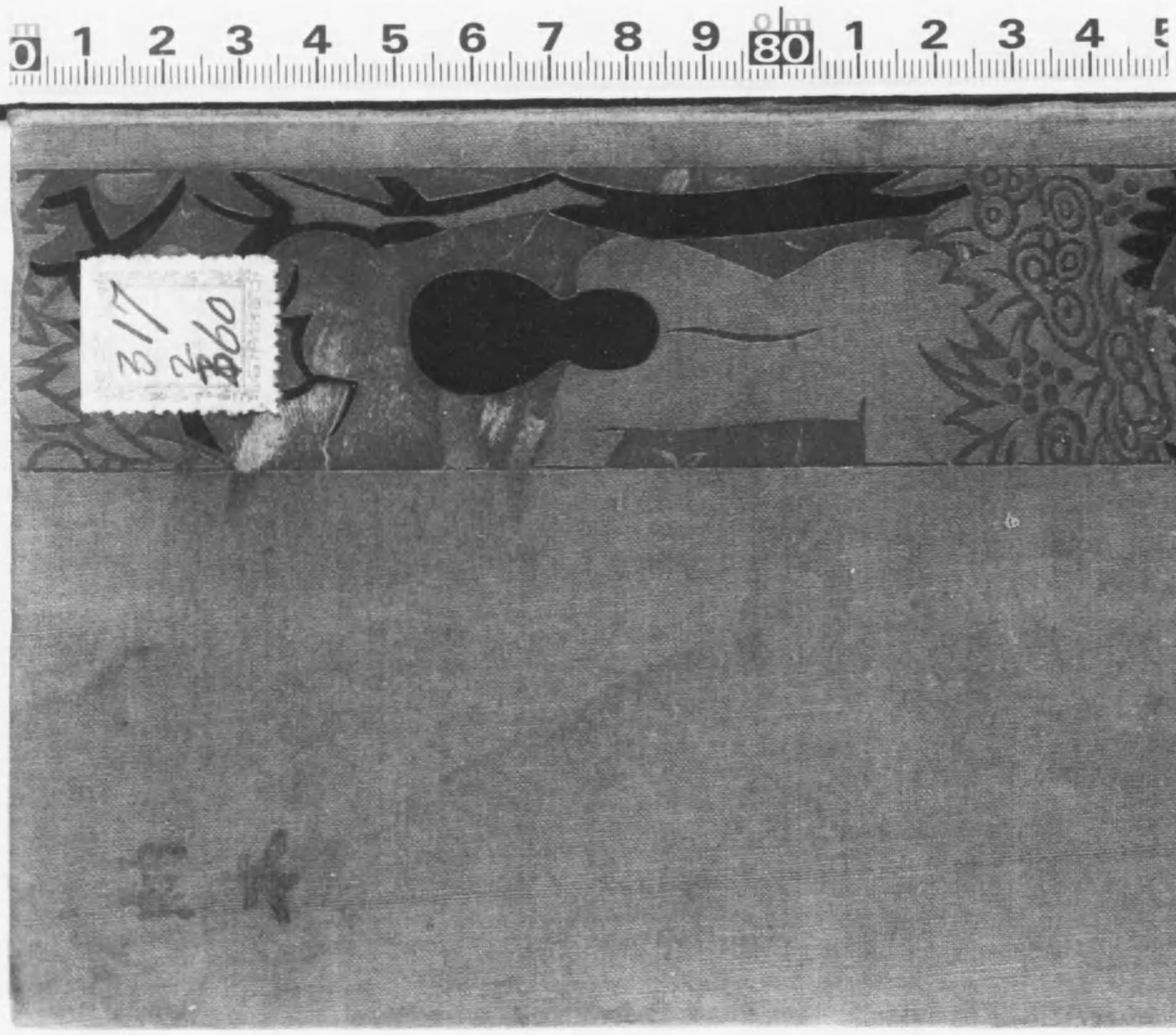
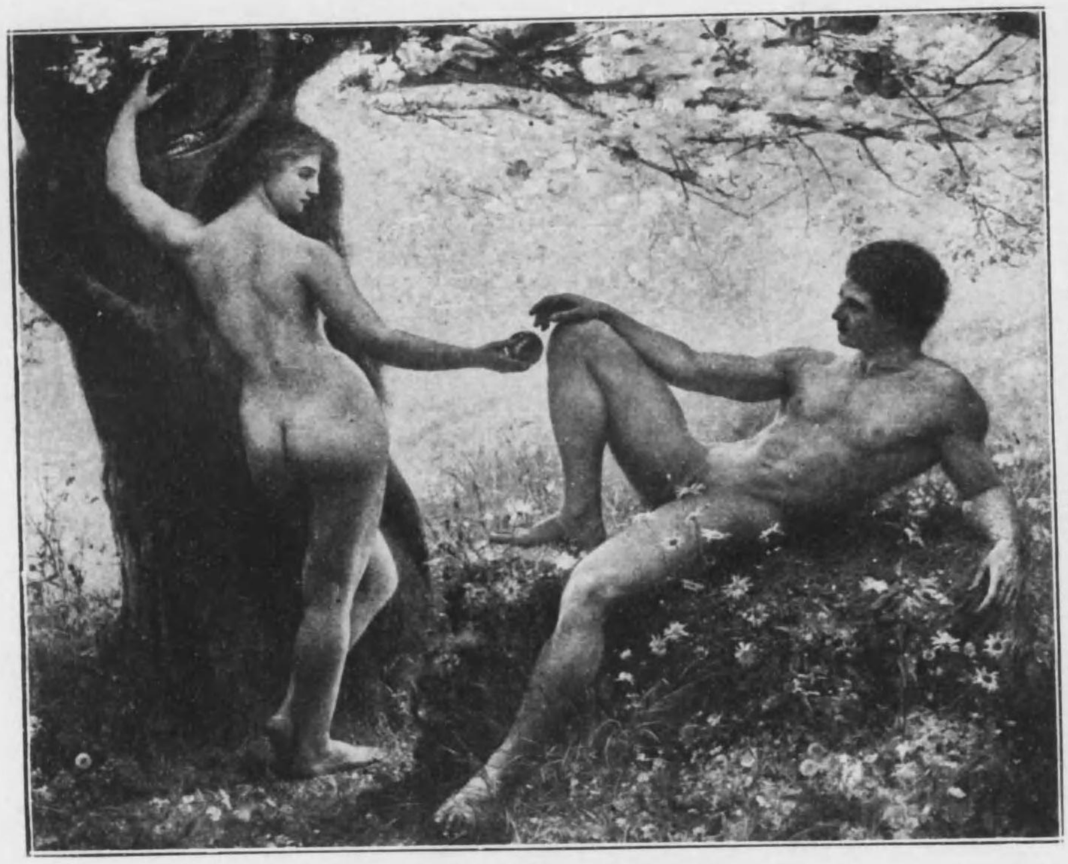

80

納本



アダムとイブ（序論及性別篇參照）

参照

同性愛篇、男性の巻及び賣笑篇、男性の巻參照

卷頭語

本書は、月刊雜誌「新青年」に連載したものに、幾多の追加と修正を加へ、尙ほ、性別篇」及び「賣笑篇、男性の卷」の二章を增補したものである。

本書を手にせらるゝ諸君は、何れも敎養のある人々であるから、特に云ふ必要もあるまいと考へるのであるが、尙ほ念の爲に一言したいのは、記載の一部分のみを見て、彼是の批評をしない樣に願ひたい事である。必ず全篇を通讀して、一貫した著者の精神を知つた後に、是非を決定して貰ひたいといふ事である。例へば「人體」といふまとまつたものは度外視して、腸の一部分を抉り出

して「不潔だ！」と云つたり、足のみを見つめて「下品だ！」といふが如きやり方をすれば、全體とは全く別種の觀を呈するであらうが、それは著者の責ではなくて、見る者の心の持ち方が間違つて居るのである。之を甲とするか、乙とするかは、悉く見る人の心の甲乙に在るであらう。鏡面の像は鏡中には無い、鏡の前に立つて居る人の姿である。

舊時代の爲政者は、「知らしむ可らず、依らしむ可し」として民に臨んだが、それと同樣に性的問題をも亦、「只管知らしむ可らず」として子弟に對したのであつた。此の性的無智の爲に、反て意外の失敗を招き、取かへしのつかない過誤を敢てしたものが多いのを救濟しようといふのが、本書の根本精神なのである。

本書中に明記することの出來なかつた事項に關しては、專門的の立場から教科書として編述した拙著「法醫學」（東京市本郷區本富士町克誠堂書店發售）を參照すれば、自ら明瞭になるであらう。

最後に本書刊行に就て、種々の便宜を與へられた水谷準、森下雨村、横溝正史、横田地巴等の諸君に、厚く感謝の意を表するものである。

昭和二年十二月

赤坂溜池の寓居に於て

著者識

内容目次

序論……一
本論……二五
一　性別篇……二五
二　戀愛篇……四二
三　同性愛篇……五七
　上　男性の卷……五八
　下　女性の卷……一〇一
四　自瀆篇……一一一

五 變態性慾篇……二二七
A サディスムス……二二九
B フエチシスムス……二四一
C マゾヒスムス……二四五
D 露出症とデバカミスムス……二五九
E ピグマリオニスムス……二六八
F ナルチスムス……二七一
G ソドミー……二七二
H コプロラグニー……二七四
六 賣笑篇……二七八
上 女性の卷……二七九
下 男性の卷……二八八

七 性病篇……一九三
八 生殖篇……二二七
九 制縱篇……二五一

——（終）——

特237
75

動脈性 動術

醫學博士
高田義一郎著

Aufklärungsfilm

序論

床は三和土で、高い所にたつた一つ有る丈の鐵柵のはまつた小窓から、申譯ばかりに日光が射し込んで來る、淡暗い獨房の中は薄ら寒くつて、佐保姫の溫いなさけを籠めた九十の春光も、此處までは及ばなかつたが、それでも監獄の庭に今を盛りと咲き亂れた沈丁花の高

い香は、馥郁として生暖い風のまに〳〵囚人の鼻を打たずには置かなかつた。普通の生活を送つて居た役人達は、『沈丁花がよく咲いたなあ』と云ふのみで、それを特に氣にも止めなかつたが、來る日も來る日も、夜も晝も、あの強い香氣が、監房を訪れる唯一の女神の便りとして、囚人の鼻に附いて離れない事は、彼等に喜悅以上の强烈な刺戟を與へて、遂に耐へ切れない程の大きい苦痛になつてしまつた。

『先生、私はとてもたまりません。あの香を嗅ぐと仕事も何も出來なくなります、第一ぢつとして居られませんや。お願ひです、何卒あの香のする木を何處か他へかたづけてくれませんか！』

それは囚人の一人が、その香から受ける性的の衝動に耐へきれぬ煩悶を、敎悔師に訴へて救はれようとした、最も眞面目な告白であつた。之は十餘年前に巢鴨監獄にあつた實話であ

るが、此の心こそ詩であつて、ハイネの歌と精神に於ては少しも選ぶ所が無いであらう。

Im wunderschönen Monat Mai,
Als alle Knospen sprangen,
Da ist in meinen Herzen
Die Liebe aufgegangen.

Im wunderschönen Monat Mai,
Als alle Vögel sangen,
Da habe ich ihr gestanden
Mein Sehnen und Verlangen.

泰西の詩聖と、東洋の無智な囚人をして、同一の心境に低徊せしめるものは、唯々此の性の天地のみではあるまいか。

陌頭楊柳枝　已被二春風吹一　妾心正斷絶　君懷那得レ知

之は唐詩選で人口に膾炙して居る郭振の詩であるが、我が柳澤淇園が之を國風に譯して口ずさんだのは、和漢の詩人の心の間に隔てぬ或るものがあつたからであらう。

町のほとりの柳さへ
　あれ春風が吹くわいな
わしが心のやるせなさ
　思ふ殿御に知らせたい

○

實に男の女を思ひ、女の男を慕ふ心こそ、天が生物の繁榮をはかり、その子孫を遺さしめんが爲に好餌として附與したものであつて、生ある限り此の性慾を持たぬ者は無く、之を捨て顧みぬ時は已に死と滅亡の門に近づいたのである。凡そ世の中に男女の兩性の別が無くなつて、若し同性のみの世界が出現したとしたならば如何であらう。男性のみの世の中は、爭鬪ばかり相踵いで起る修羅の巷であるだらうし、女性のみの集團にはもう紅粉も華麗も無くなつて、恐らく墓場の土の樣な灰色の淋しさが殘るであらう。否なそればかりでは無い。其處には唯々貪慾と殘酷のみがあつて、美しい人情の迸りは爪の垢程も無くなつてしまひ、一の發憤も、半分の刺戟も影を隱してしまふに違ひない。それは宦官の歷史に印した事蹟や、年とつた寡婦の日常から想像するに難くない。

しかし如何に貴重な傳家の寶刀でも、無闇矢鱈に振り廻されては、尺害があるのみで寸益だもない。思ふ事が悉く意のまゝになる帝王で、此の方面にのみ精力を傾注したが爲に、身を亡ぼし、國を傾けたものはカラカラを造つたローマの君主ばかりでは無かつた。

『靈帝、裸遊館を起す。宮人二七以上、三六以下、皆靚粧してその上衣を解き、唯々內服のみを着く。或る者は共に裸浴し、西域、獻ずる所の茵墀香を取つて湯と爲す。餘汁の渠に入るものを名づけて流香渠といふ。』（原漢文）

之は『談薈』に記す所であるが、それは決して男性のみの欲する所ではない。『陔餘叢考』第四十二卷には、王女がその兄君の放縱なのに匹敵せんが爲に活躍せられた事等を、詳に載せて居るのを見なければならない。

『宋の廢帝の時、山陰の公主、帝に謂て曰く、妾は陛下と皆、體を先帝に托す。陛下の後宮は千百なれども、妾には惟々駙馬一人あるのみ。事の均平ならざること、何ぞこゝに至るや

と。帝乃ち、爲に面首左右三十人を置く。

齊文帝王皇后、鬱林王の時に當り、尊て皇太后と爲し、宣德宮と稱す。鬱林、爲に男、左右三十人を置く。皆、前代未だ有らざる所とす。』（原漢文）

○

人類の始祖と唱へらるゝ男女が、エデンの園で禁斷の智慧の果實を食べた瞬間に、羞耻の心を起したといふのは何を意味するのであらうか。人類學者や考古學者の著述の中で、太古の民族が穴居して居た洞窟の壁畫や、彫刻の多くは、性に關する描寫である。而して之こそ繪畫や美術の濫觴であらうといふ意見を附したものを讀んだ。性的情緒が、人類に男女の別を生じたと、殆ど時を同じうして起つたと共に、此處に裝飾や禮節の必要が胚胎したであらうといふ事は、鳥類等の生活からも類推されるが、藝術も矢張りさうだつたらうと考へられ

る。文字の無い以前から性の力が暗默の中に世界の文化を進展せしめる根源となつた事は、決して否定出來ないであらう。人類今日の隆昌は、他の動物と異つて最もよく性の運用よろしきを得た結果であると云つても、間違ひではなからう。

ポンペイの町に在る邸宅の壁畫に春畫があつたり、玄關の入口に男根の彫刻物が嚴めしく聳えて居ること等を擧げなくても、上代の人が今日の人と、性的事故を見る眼を異にして居たことはわかる。生殖器崇拜は別としても、性慾その物が惡くもなければ、不潔でもあるまい。之を惡いとするも、不潔とするも、皆自分自身の心の反映に過ぎない。禁斷の木の實を口にする迄の、アダムやイヴは裸體で少しもやましいとは思はなかつたと聞いて居る。高貴の中に人となつた方々が、羞耻に就ての所感を全く平民と異にして居るのは、今日でも事實だといふ話は、澤山聞かされる所ではないか。明治維新の風雲に際會して、位人臣の榮を極

めた一世の幸運兒、伊藤博文公が、馬關の春帆樓で入浴の時に、陰部を手拭で押へて居た爲に、無名の一、三助から、

『貴公はお育ちが賤しい人に違ひない！』

と喝破されたのは有名な挿話ではないか。性慾その物は生命のある人間と不即不離の本能で、別にそれ自身惡いもので無いばかりでなく、生殖器も頭も心臟も皆同樣な人體の要素であつて、生殖器のみが獨り下等であつたり、惡いものであつたりする筈が無い。畢竟その人の性慾に對する態度が、惡いか惡くないかに依て定るものではあるまいか。

○

『性慾は不潔なものである、故に之を絶對に禁壓してしまふのが、最高の道德である』

と說いた人は未だ無い樣に思ふ。僧侶の中には、一生涯、性慾——但し之を外界に表現すること——と沒交渉で終つた人は少くないが、之が爲にその人は偉いからその人に習へといふ敎訓をした人も無いし、又その話を聞いてもその僧侶をそれが爲に尊敬する程の事もあるまい。親鸞は肉食妻帶を許す淨土眞宗の一派を開いた爲に、彼是非難を受けはしたが、今日此の故を以てその宗旨を不都合だといふ人も無く、釋迦にも孔子にも子供があるが、之が爲に大聖の德が傷けられたと說く者は、融通の利かない頑固一點張の儒者の中にも無かつた事と考へる。性慾を卑しむのは、之を表現する狀態が當を得ないのを、戒めんが爲に過ぎないが、動もすれば當を失し易い程、人の性慾が强烈である所から、特に之を高唱して、、往々てその出發點を忘れる道學者の暗示のまゝになつてしまふのて過ぎないと思ふ。

『南都て又一生不犯の尼ありけり。つひにあしさまなる名立ちたる事を無くやみにけり。臨終いかゞあらん、世にありがたきためしに、人々いひける程に、病をうけて大事になり

ければ、善智識の爲に、小僧を一人しやうじて念佛をすゝめければ、念佛を申さで、「鷹羅のくるぞや〳〵」といひてをはりにけり。

一期の間、ゆゝしく思ひとりては侍れども、心の中には此の事をかけたりければこそ、かくをはりのことばにも云ひけめ。何事もたゞ心の引きかたが善惡のむくゐを定むるなりよくよく用意有るべき事にこそ。』(「古今著聞集」第十六卷)

之では如何に一生不犯の尼と呼ばれても、又形に於ては純潔の譽れを得ても、一向有難くない。遂に一個の形式の奴隷に過ぎない。親鸞の信仰は徹底して居るから、形式を踏みにぢつて精神に生きる道を見出したのであらう。

新教の開山マルチン・ルーテルは、口を極めてローマ修道院の墮落や、それに伴つて起る嬰兒殺しを非難した。加之、舊教が僧侶や尼の獨身を强要しながら、一方には性的放縱に寛

大であつたのを痛罵して、娼家は魔の住家である、娼婦はサタンの娘であるとまで極言した人である。しかし彼は禁慾せよとは說かなかつたのみならず、夫婦間に於ける性的行爲の必要を高唱して、何れか一方が性交不能の場合には、他の男女との情交を認めてやらなければならないとまで說いて居る。而して自ら率先して之を窮行實踐した。形式ぬきの點に於て我が親鸞と揆を一にした所がある。

フリードリッヒは法醫學的精神異常論の中に、ゼノアに居たカタリーナといふ一尼僧が、宗教心は熱烈で、身を持する事も極めて嚴格であつたが、胸中の情火を抑へる事の出來ない日が時々あつて、之が爲に身を地上に横へて Liebe, Liebe, ich kann nicht mehr ! と絕叫しながら、十字架上の教父に戀着を感ぜずには居られなかつた事實を載せて居るのは、著聞集の尼と全く同一人と見える位、相似た點が多いではないか。

けれどそれは一、二の尼の事ではない僧尼がキリストや釋迦の像に愛着を感じ、マリヤや觀世音を夢精の對照にする例は、枚擧に遑が無い。今日ラマ僧が、少しも禁慾生活を實行せずに、妻といふ名目無しに檀家の妻女を犯す者ばかりであるとの話が、引證として不適當であるとしても、一高僧がバリーの妓樓に赴いて、娼婦に白衣を着けて屍體の樣に粧はし、以て情慾を滿足させ、それで宗教上の制裁を免れたといふタキシールの報告を見たり、天悅に對する大悅の符調で、日本の僧侶間に男色が行はれた事實等を併せ考へれば、次の『東北院職人歌合』の巫女の歌は、かゝる禁慾を餘儀なくせられて居る社會の內面を、徹底的に茶化して居るものゝ如くにさへ見えるではないか。

巫女（口寄せこいふ占ひをしたり、鼓をたゝいて踊つたりする神職の女）

君と我、口を寄せてぞねまほしき

鼓も腹も打敲きつゝ

『四十二章經』に女色を戒めて『愛慾之人は、猶ほ炬を執りて風に逆ふて行くが如し、必ず手を燒くの患あり、愼んで女色を視ること勿れ、亦共に言語すること莫れ』とあると聞くが、絕對的の禁慾が如何に困難であるかを、思はせるものが有る。その絕大の困難は人間としての自然に逆つた生活を送らうとするからであつて、豈、執レ炬逆レ風行のみならんやであらう。

○

『志林』に次の話が出て居る。

蘇東坡が養生の事を論じて、『色慾を去るのが第一だ』と云ふと、張子規は反對して下の如く語つた。『漢の蘇武は夷狄に囚はれた時に、雪を嚙み、氈を食つて飢を忍び、背中を踏まれ

て血を流しながらも猶ほ屈しなかつたが、其後夷國に居る間に、胡の女に一人の子供を生ました。蘇武が海上で困窮しながらも、猶ほ色慾を除き得なかつたのを見ると、立派な座敷に住んで居ては到底之を除き得ないだらう』と。之を聞いて一座の者は皆笑つた。而して東坡も、『成る程さうだな』と云つて感心した云々。

寺門靜軒の『痴談』には、『某國に百餘歳の翁が國主に召されて、種々養生の法を問はれ、房事は如何かと云はれた時に最早三十年近くも婦人を近づけませんと答へたが、數へて見ると彼は八十餘歳までも婦人を近づけた事になるので、君候初め一坐大笑ひになつた』話が載せてある。

思ふに性慾の抑壓は必ずしも、養生や長壽の本義ではないと同時に、性慾は又、幼年時代を除いては一生涯、人類と離れられないものである。それは單に蘇武の窮困の日のみに止まらないので、リースマンがミュンヘン醫事週報に載せた所によれば、歐洲大戰に際して戰線に出て砲彈雨注の下に立つて居た兵士さへ、假睡中に時々夢精を催したといふ。但し女性は此の期間が短く、大體に於て月經と終始すると考へられて居るが、五十前後の閉經後に於ても、性慾は依然として殘存し、性交も夫子自らは敢て辭するものでないと學者は認めて居るのである。此の如く性慾が、食ひついて離れないのならば、之を如何に處置すべきかを考慮しなければならない。所詮、人生が性の苦闘であるならば、その戰術を講じないのは迂濶であらう。

『性の問題が一生涯人につき纏ふ？
人生は性の苦闘に過ぎない？
そんな言葉は云ひ過ぎである!!!』

と咎める前に考へて貰ひたい。『犯罪の裏面に女がある』とは聞飽きて居るが、泥棒した金を貯蓄する人が無くつて、右から左へ傾斜の巷へ費される所を見れば、『金色夜叉』とはいふものゝ、金は單に方便であつて、目的は色にある。性慾の無い所に泥棒は無いとは云へないまでも、强盜をする丈の元氣が失はれる位は察しられる。『兎角浮世は色と酒』といふが、その酒は『酒はたぼ』といふ條件附の、獨立出來ない酒ではないか。

○

勿論、之を前提として性慾を謳歌する者では無い。英傑アントニーが何故失脚したか位は知つて居るつもりである。

ルーテルは云つた。"Wer dem Naturtrieb werden will und nicht lassen gehen, wie Natur will und muss, was tut er anderes, denn er will wehren, dass Natur nicht Natur sei,

dass Feuer nicht brenne, Wasser nicht nässe, der Mensch nicht esse, noch trinke, noch schlafe."

私はルーテルを尊敬するけれども、しかし此の言葉の通りに『人が天賦の性慾を抑制するのは、飲食や睡眠を止めるのと同一な、反自然的行爲である』と說かうとするものでは無い。飲食や睡眠を廢すれば人は死ぬが、性慾を廢しても死なない事を忘れはしない。それを右の如く說くルーテルは醫學的知識の少い、ローマの殿堂の形式的禁慾主義を攻めんが爲に、熱狂した宗教家であつた位は、之は度外に置かぬつもりである。

しかしこの問題はいつでも儒教的精神に凝り固つた故老から、往々にして攻擊せられる事があるから、私は『齒の浮く樣なキザな事を云ふ怪しからん奴だ』といふ誤解を避ける爲に、努めて古い話を餘計に引合ひに出したいと思ふ。本來東西に普及し、古今を一貫した問

題であるから、古い畠から材料を捜しても決して少い事はあるまいと考へて居るのである。

○

ドイツは理智を重んじる觀念が強い國だから、學問と名がつけば萬事非常に自由にしてあるので、ベルリンの同性愛研究會の會員には、昆蟲の男色を研究して居る一博士があつたと傳へられて居る。性の問題は廣くて方々に引つかゝりがあるから、何處へでも持つて行けるかはりに、何から手をつけていいか見當がつかない。性慾と闘つて、如何に此の猛獸を統御して行かうかといふ爲には、勢ひ敵狀の如何を詳にしてかからなければならないし、又之を征服し得て華々しく凱歌を揚げた話と共に、慘ましくも之に屈服した物語も加はらねばなるまい。ロダンの彫刻は抱擁と接吻のみではないが、その中に幾分本能的分子が加味されて居ると云はれるのと同じ樣に、見る眼の如何に依つては解釋に甲乙を生じないとは云はぬ。

しかし、『柳下惠見レ飴曰、可二以養一老。盜跖見レ飴曰、可二以黏一牡。見レ物同而用レ之異。』であつて、畢竟、飴は飴である。同一の飴をどう見るか、どう取扱ふか。柳下惠となるか盜跖となるかは、見る人々の隨意とするより他に仕方がない。現に兄弟である柳下惠と盜跖とが、一塊の飴を見てさへその解釋は、これ位も違つて居るのであるから——。

○

兎も角も文化といふものが進んで來れば來る程、生活難が甚だしくなつて來て、自分以外で更に妻子を養ふ事が容易でなくなる爲に、相當の資産を作らなければ結婚が出來なくなる。晩婚の必要が起つて、中年以後まで結婚しない風習が一般に及ぶのであるが、しかし如何て文化が進んでも、性慾がそれに反比例して退化する事は無い。否な文化は反つてケバケバしい色彩を濃厚にして、性的の刺戟と誘惑とを無慈悲にもこの晩婚の士女に衝きつけながら

『之でもか〳〵』と隱險な微笑を湛へる程の意地惡であり、いたづら者である。

生活難と華美の風との板挾みとなつて、昔以上にいろ〳〵の形式の賣笑が行はれるのは、燦然たる文化の裏面ではないか。『シビリゼーション(文化)は卽ち、ジフイリゼーション(黴毒化)である』、といふ西諺は、青春の血と晩婚の俗との十字路に迷ふ現代の、一皮剝いだ醜い姿ではないか。賣淫、墮胎、殺兒、花柳病、變態性慾等、等、等が卍巴の樣に入亂れて、文化を誇る大小のビルヂンクの內外に、旋風の如く渦卷いて居る中に、雄々しくも進んで行かねばならぬ人々にとつては、昔の人とは較べものにならない程、性の何たるかを究めて置く必要があるのである。

闘性術！　その名はあまり簡單であるが、一歩踏み込めば數限りも無い長短深淺の變化に富んだ迷路の集積である。闘性術こそ青壯年者の性教育であつて、又同時に文化人の持たね

ばならぬ、向上の路地や裏道の鍵である。地圖に載せてある本道や、旅行案內に書いてある汽車は、滿員で、一杯で、いくら待つても中々乘る事の出來ない程、就職の道のない文化の世を、斜に突切つて早く進む、輕快なる自動車の切符である。

之を知らずに、向う見ずに進んで誘惑の陷穽に入るのは愚である。之を恐れて直立不動の儘に過するのは卑怯である。又いくら之を避けようとしても遂に之を避け得ない事は旣に云つた通りではないか。性慾は天地開闢の始めから、世の終りまで、卽ち人類に男女の別の存する限り、脈々として心臟の鼓動の止まない間は、二六時中、人類の體內に巢くつて、のさばり返つて、追出さうとしても出て行かない居候の辯に自ら主人公の活動を左右する過激な奴である。獅子身中の蟲は未だやさしいが、人は臨終の日までも性慾の桎梏から一歩も外へ出る事が出來ない。唯々之に對する最上の策は、之を知つて、之を恐れず、之を善用し、

その横暴を退け、斷じてその奴隷となること無しに、目ざす地點に突進することで、之を名づけて鬪性術といふのである。

來れ同好の士、相共に膝を交へて鬪性の祕術を攻究しようではないか？

本論

性別篇

肥料臭い畑のかぼちやの花にも、淋しいお寺の庭に立つて居る銀杏の木にも、雌雄の別がある。唯々徒に咲いて居る樣に見える櫻や桃の花の中にも、立派に雄蘂と雌蘂とが分れて居る。

無心の植物でさへも、さうであるのに、我々有心の動物として、どうして中性で居られようかといふ勢で、うごんそつくりの姿で、慢然として生きて居るかの如き蛔蟲にも、雌雄

が分れて居るのであつて、動物が高等になればなる程、雌雄の別は愈々明白になり、兩者の行爲までが夫々異つて來るのである。

「蛙鳴蟬噪」と稱して、蛙や蟬の鳴き聲を無意味なものと考へたのは、昔の儒者の自然に疎かつた事を證據立てるに過ぎない。蟬のミン〳〵やオーシツク〳〵も、松蟲や鈴蟲のチンチロリンも、雄が奏でて、異性の心を樂しましめようとする立派な聲樂であつて、雌には之を奏でる能力が無い。沈默して聞き惚れて居る雌の蟬は、「啞だ〳〵」と呼ばれてもち竿に親しむ子供達からも、低級なものとして評價されなければならない。

螢が夜な〳〵尻を光らして飛び廻るのは、車胤といふ貧乏な支那の青年に、本を讀ませんが爲の義俠心や、慈善事業ではなかつた。車胤の死後何千年を經た今日でも、夏の夜を待つてわざ〳〵螢を捕へずとも、四季の別無く、街燈の何千燭光の電氣の光で、遠慮せずに苦學

の出來る今日でも、多數の螢が昔のまゝに飛んで居るのは、「泣かぬ螢が身を焦がす」と素破抜いた俗諺子の說の如く、窈窕たる異性を求めんが爲に、千年一日の如くたゆまずに敢行して居る、勇ましい雄の夜間飛行のサーチライトなのである。

プロペラーの音を聞きつゝ思ひけり
なべて男は勇ましきかな

と、サーチライトを持たずに、飽かずに飛行家の雄姿を仰いで居る雌の螢は、盲目螢こけなされて、螢狩の群の嫌はれものになつて居る。

○

「蚤の夫婦」と云つて、蚤の雌は立派な體軀と豐滿な肉體とを持つて居るが、雄は矮少で貧弱な姿をして居る。蚊や虻の雌は、人間や獸類の血液を吸ふけれども、雄は花の露に咽喉を

うるほすのみで、決して血液を吸はうとしない。ロイテルは此の雌の肉食性を、卵を孵化させるに必要がある爲ではないかと考へて居る樣である。

蜘蛛も亦、蚤と同樣に雌が大きくて雄が小さい。小さい雄は、時々蜘蛛の巢の隅の方で、一種の舞踊をやつて見せて、大きい雌の機嫌を取るのであるが、之は舞踊に依つて雌の本能を呼び起さないと、小さい雄は忽ち大きい雌の食慾の犧牲となつて、その胃袋の中へ粉碎して投込まれなければならないからであると云ふ。雌が大きく且つ美しく、而して强烈な食慾を持つて居ることは、下等動物界に通有の事實なのである。

○

所が高等動物の世界はそれと反對に、雄が文字の如く「雄大」であつて、且つ美しいに反し、雌は體軀の貧弱なるのみならず、色彩も亦美しくないのである。孔雀はいはずもがな、深山

に住む雉子から、裏庭に餌をあさる鷄に至るまでその例に洩れない。鶯嚶の睦まじさを羨まれるをしごりや、「鶯宿梅ぢやないかいなあ」と謠はれる鶯等、鳥類は悉く雄が著しく美しい羽を持ち、且つ良い聲で鳴くことが出來るのである。

けれども、それは鳥類ばかりに止まらない。ライオンや鹿の樣な哺乳動物でも、雄には美しいたてがみがあつたり、角があつたり、或は百獸を威伏せしむる獅子吼や、妻戀ふ雄鹿の可憐な聲があることに依つて、知ることが出來るであらう。

麝香鹿、麝香猫、麝香鼠等の身體から、發する麝香のかをりは、云ふまでもなく異性の心を引く爲のものであるが、之も亦主として牡に於て著しく、牝には極めて貧弱なのである。

その麝香を動物から採集して、之を自分の身體にふりかけて、人間の男女が異性の嗅覺を刺戟するのは、甚だ當を得た方法である。牡鹿が、大きな樹枝の樣な角を頭に載せて居るの

を見る時には、牝鹿の心臓の鼓動は定めて激しくなる事であらうし、人間の眼からは鬱陶しい樣に思はれても、牡のライオンが頭に長い房々したたてがみを戴いて居る姿を見る度に、牝のライオン達は、

『あのたてがみの色といひ、長さと云ひ、まあ何て男らしいんでせう。あゝいふ方と一緒に暮すことが出來たら、どんなに肩身が廣い事でせう』

と、異口同音に讃辭を呈すに違ひないのである。

○

人類にも男女の別がある。人類は母の胎内生活の早期から、詳言すれば妊娠の第十五週目頃から、既に男性と女性とにわかれてしまふものである。どうして男性となり、何が故に女性と定められるかといふ原因や理由は、未だ詳でないけれども、人類のすべてが男又は女

の何れか一つの性を持たなければならないといふ運命のみは、幾千萬年かの古い昔から決定されて居てしかも不變である。幾千年前の祖先もさうであつた、幾千年後の子孫もさうであらう。現在も亦さうである。

所謂「半陰陽」或は「ふたなり」と稱せられる中性——實は兩性——の者も無いとは云はない。しかしそれは極めて少數の畸形者に過ぎないのみならず、外見上半陰陽とされるものの多數は、ほんの外形的の不具、或は出來そこなひに止まつて、本統の半陰陽ではないのである。即ち人類は、極めて少數の例外を除けば、古今を一貫して、男にあらずんば女、女性にあらずんば男性で、何れか一つのジェンダーに屬して居る者である。

所で下等動物では雌が大きく美しかつたのに反し、高等動物では牡が大且つ美であつて、牝は小さく見すぼらしいものであつたが、最高等の動物といひ、萬物の靈長であると威張つ

て居る人類に於ては、一體男性が美しいのか、或は女性が美しいのか？　之には一寸判斷に遠ふ所がある！

○

若し男性の方が美であるならば、理窟に合ふけれども、反對に女性の方が美しいとすれば人類は高等動物の例外とするか、或は人類に於て再び下等動物に還元することになる譯である。しかも繪畫に、彫刻に、美人といふのは女性に限つて居るかの觀があり、途上に、宴席に、花を欺くばかりに美しい女性が多いのに引きかへて、如何に男性の姿の淋しく、如何に男性の色の醜き事よ！　嗚呼！　人類の男性は徒に大きいのみで、果して醜いのであらうか？人類は高等動物の例外として、結局、下等動物と其の撰を一にするものなのであらうか？！

此の問題を解決する爲に、先づ男性と女性とを兩々相比較して見なければならない事になつて來た！

○

男性の體格は大きくて、肩幅が廣いが、腰の方が狹くなつて居る。しかし女性は之に反して肩幅が狹く、腰の幅が著しく廣くなつて居るのである。云ひかへれば男性は肩幅を底邊とする二等邊三角形に近く、女性は腰幅を底邊とする二等邊三角形を聯想させるものである。男性は腹を動かして、大きく緩く呼吸運動するが、女性は小さく、急速に胸で呼吸を營む。女性は胸に大きい二つの乳房があり、腹に子宮といふ神秘的の器官を有して、胎兒を生んだり育てたりする魔力を持つて居るけれども、男性には子宮が無い。乳房は無くて「若し有るとすれば此處であるぞよ」といふ標識を存するに過ぎず、從つて子供を養育する事は、どうしても出來ない者である。男性は細く、長く、而して硬く、筋肉が隆起して居るけれど

も女性は太く、短く丸味を帶びて居て、白く、柔かくなだらかであるのは、筋肉の割合に皮下脂肪層がよく發達して居るからである。之を一言にして盡せば、男性は輕快敏捷であり、女性は鈍重圓滿であつて、一は男性細胞の精虫を思はしめ、他は女性細胞の卵子の昔の面影を傳へて居るものがある。

此の如き兩性體格の相違を比較して、何れが美であるかは、容易に似て、實は中々むつかしい問題である。之を山岳に喩るならば、男性は巍峩たる日本アルプスの連峰であり、女性は奈良の若草山であり、又京都の東山である。若し之を海洋に比するならば、彼は狂瀾怒濤の澎湃たる荒海であるが、是は「ひねもすのたり〳〵哉」と歌はれた春の濱邊でなければならない。動が美か、靜が美か、それは見る人の心のまゝであり、趣味の定める所である。アルプスの峻も美しいが、若草山も美しい、但し等しく美しいと云つても、そこに美しさの種類が違ひ、標準が別である。二者を比較することは、一尺と一貫目と何れが大きいかと云ふが如く、或は出來ない相談であるかも知れない。

兎も角も、私は男女美醜孰れぞといふ問題に、卽答することの出來ない者である。

○

人類の女性は確に美しい。雪の肌、花の顏、誰かそれを美しくないといふ事が出來やう！閉月羞花と形容し、沈魚落雁とまで讃美されて來た美女の姿を、醜いと云ふことは、恐らく女性に對する最大の冒瀆でなければならない。飛燕に似たりと云はるゝ痩形の女性も美しい、玉環の如しと稱せられる肥つた女性も美しい。私はあらゆる女性の美を認むる點に於て、決して人後に落つるものではないと確信して居るのである。

In ihrer Welt ist keine Fehle,

Ist alles ruhig, voll und weich;

Der Blick in eine Frauenseele

Ist wie der Blick ins Himmelreich.

○

しかしながら此の如き女性美禮讃の聲は、悉く皆男性の口から出たものであることを忘れてはならない。男性の眼に映じ、男性の心に描かれる女性美は、異性に對するあこがれの爲に、著しく誇張せられ、擴大せられたものであつて、決して公平でない、又絶對でないことを考へる必要がある。

公平であり、絶對である判斷は、どうしても第三者をして下さしめなければならないのであるが、私達は未だ之を第三者から聞いた事もなく、又近き將來に於て之を聞き得べしと豫

想することさへ出來ないのである。

人類の眼に映ずるライオンの雌雄、鹿の牡牝の美醜如何は、何れか一方に對する憧憬の爲に正當の判斷を誤られたりしない、極めて公平なものであるから、若し地を代へてライオンや、鹿の眼に、人類の男女何れが美であるかを聞くことが出來れば、之こそ最も公平な判斷であらうと思はれる。

しかしそれは出來ない事である。出來ないけれども、若し出來たと假定したならば如何であらう。想像にして許されるならば、ライオンや鹿は、靜に人類の男女を見較べながら、

『我々自身の相互では、牝には牡が美しく見え、雄には雌が麗しく見えて、公平な判斷が出來ないけれども、我々の牡が美か、牝が美かに就て人類が感ずると同樣の考が我々の眼に依つて人類の男女の上に下されるのである。』

と論斷するに違ひないであらう。

○

高等動物に於ては、一般に男性が美しいのに引かへて、最高といはれる人類に於てのみ、女性の方が美しいといふパラドックスの起ることは、之こそ人類が萬物の靈長であつて、單に天然の姿のみに滿足せず、綺羅を纏ひ、錦繡を帶しても未だ足らず、紅粉を裝ひ、臙脂を塗り、或は麝麝の香を籠めるが如き修飾的技巧が加へられるからである。その人工的裝飾に考慮を廻らして、天然の美醜を征服してしまふ熱心と努力とに於て、女性の方が男性を凌駕すること數等、否な數十、數百等だからである。

若し人類の男女が、一絲をも帶びない赤裸々の姿となつて、紅粉や錦繡の補助を俟たずに、第三者であるライオン等の如き人類以外の動物の前に批判を求めるならば、それは必ず人類

がライオンの雌雄に對する美醜の判斷と同一のものを與へることであらう。

人類は決して高等動物として、例外の體驅を持つて居るのではない。唯例外の觀を呈せしめる程に、優秀なる智能と、技巧とを持つて居て、之で天然の姿を打消して居るに過ぎないのである。

○

だが、そんな事はどうでも良い！

大小も、强弱も、細太も、剛柔も、そんなものは皆注意する必要はない。そんなことをいふのは理窟である。理窟ばかりでは世間は立ち行かない、理窟をはなれた所に、人生の諸相があり、現實の浮世があるのではないか！

兎にも角にも人類には男性と女性の別があつて、誰でもその何れか一つに屬しなければな

らず、而して男性或は女性であるが爲に、公平でない、絶對でない判斷を下しながら、滑稽にも之を公平とし、正當と確信して、勇敢に百般の活動をなし、あらゆる行爲を敢てして居る。之が性を經とし、情を緯として三千年を過して來た人類の世界ではないか？

現代に於ける人類の環境は、その引き續きである。男性なるが故に、女性を美しく考へ過ぎ、或は女性であるが爲に、男性に憧憬し、男性を過賞するものゝみが集合して、黒を白と見、青を赤と思ひながら、自らその誤りを知らずに居る爲に起る、いろ〳〵の活劇が極めて多い。第三者から見れば滑稽でも、當事者連の至極まじめな所に、人生の妙味があるとも云へる。此の性を中心としたパラドックスの雰圍氣中に、一體どんな事件が現出されて居るか？　私達は先づそれを見なければならない。之が爲に發奮して成功する者もあれば、之が爲にやけを起して淪落する者もある。之が爲に殺傷し、之が爲に盗掠する者は一體どれ位多

數にあるかわからない。淺ましいと思つても、之が人生である以上、生存して居る限りは、之を知る必要がある。若し之を知らなければ、如何にして此の人生に處し、はた又如何に己を持して行くべきかわからないであらう。

さあ！　諸共にゲートルの紐をしめて、此の人生行脚の途に着かう!!

戀愛篇

文藝に、或は「春の眼ざめ」といひ、或は「戀を知る頃」等といふ時期が誰にもある。思春期又は春期發動期と云ふ醫學用語は、餘りに露骨で、又餘りに下品であると考へる人もあらうが、戀とは果して幾何の程度迄詩的なものであらうか？

Amors Triumph

プラトーニック・ラブといふ名稱はある。しかしそれは戀の經過の一部分ではあるまいか。部分的に詩的の愛は無論多いが、果して徹頭徹尾、幾十年間を詩的に終始する純粹なプ

ラトーニック・ラブが有り得るであらうか。少しく疑無きを得ない。しかも之に反して、性慾のみ有つて戀の無い世界はいくらでもあり得るので、到底兩者のバランスは取れないのである。

ドンナ・フリアといふ妻君は、ふとした機會からドン・ファンといふ美少年を愛した。彼女は單に人の妻であるが爲の、貞操と名譽とのみにでなく、心から純潔の愛を持續しようと堅く決心して居たのであつた。しかし精神的と思つて居る愛は、無意識にいつの間にか肉の形に表れて來て、それと氣がついた時にはもう間に合はなかつた。彼女は握手した。接吻した。而して——遂に抱擁せずには居られなかつた。鷄卵との思ひつめて牝鷄が溫めて居た卵からは、——鷄ではない——思ひがけないあひるの雛が出て來たのであつた。

此の話に「あゝプラトーンよ。君は深遠な想像を以て、不德の橋を渡したのだ」と附加へ

たのはバイロンである。詩人バイロンはブラトーンの愛の永續しないことを證明した一人である。

ドンナ・フリアの話は若い燕との共同生活を聯想させる。共同生活も始めは字義通りに考へて居たかも知れない。しかし彼等はいつか親になつて居る自分達を發見した。平塚雷鳥女史が、何かの雜誌に書いたものゝ一節に『處女にあつては戀愛のない、若くは戀愛から分離した、單なる異性に對する官能の要求といふやうなものは有り得ないと信じて居る。若し有つたとすれば例外である』とあるが、處女が官能に無關係であるとはいへない。處女とは官能的の經驗の無い女性であつて、無經驗だから之に思及ばない丈の話である。大阪の蛙が、江戸の事を知らないのと同じで、大阪の蛙だから江戸には生き得られないといふのではない。現にその言葉の中にも、處女以外の者は此の限りにあらずの意味が織込まれてあるが、

一度官能の經驗を持つた女性は、最早處女ではないのであるから、以上の言葉は、言ひ換れば「無經驗の間は官能的の考へは持たないけれど、經驗のある者は決して然らず」となるのであつて、表面には否定に見えるが、一皮すけば肯定して居る、世にも巧妙な修辭法である。

○

文化の高調せらるゝ現代には無いが、十九世紀までは確に存在して居た「戀の病」といふものは、戀わづらひとも云ひ、江戸時代には癆瘵とも呼んで居た。此の疾病は意中の異性と面會して、談話でもすれば治癒する樣に、文學の上からは考へられるが、事實上には左樣簡單に濟まなかつたので、之れ亦戀愛なるものが、宗教家や哲學者の云ふやうに愛他的にして、且つ無我的なる高尚無比の純精神的現象でない事を證據立てるのである。

○

碩學ベーンは『異性間の愛情は、肉體結合の快感に對する慾望である』と云つて居る。マンテガッツァーはより以上に露骨な定義を下した。曰く、

In den tieferstehenden tierischen Formen wie auch in den menschlichen Naturen von niedriegem und tierischem Charakter ist die Liebe jede Tastemphindung nicdts anders als Berührung nnd Betastung.

『人獸一如、戀愛則接觸』と聞けば、宗教家はサタンの叫びであるとして耳を掩ふであらうけれども、春の眼ざめは抱擁といふ結論に達する序文に過ぎない。異性間の愛情が、抱擁に依つて固定せられ、性的關係の障碍が夫婦の結合を破棄するのは、惡魔でない通常の人類世界に於ける現實の姿ではないか。

若しそれを禮式の發達した文明國人に於て考へ得られないといふ人は、暫く眼を轉じて原

始的民族の、儀禮に依つて修飾せられて居ない狀態に見るがいゝ。ライッエンスタインは彼等の關係を述べてかくの如く云つた。

„Momente dafür, dass in dauerundes Band zwischen Mann und Weib geknüpft wurde, waren nicht vorhanden; was die beiden Geschlechter gegenseitig anzog, waren geschlechtliche Trieb"

性慾のみが男女長期間の連鎖であるとは、果してラ氏の云ひ過ぎであらうか。

否！　原始民族の男女間には、性慾のみがあつて、戀愛はないのである。彼等は戀愛の何たるかを知らず、戀愛といふ事實を表はすべき言語を有して居ないのである。乞ふ、之をッエルネルに聞け。

„Der Neger liebt, wie er isst und trinkt……, tatsächhich niemals hört man dort von einer

Liebesgeschichte. Die Negerin besitzt niemals einen Schatz, weder in ganz jüngen Jahren, noch nach der Verheiratung."

黑奴の世界には一篇の情史も無く、又一人の情人を有する者も無く唯々默々として食ふが如く、又飲むが如き心を持つて異性に對して居るのではないか。故に之を忌憚なく喝破するならば、正にキオルダノの言葉のまゝで有らねばならぬ。

„Der Mann liebt das weib um der Vulva willen."

道學者は此の言葉を耳にすれば、必ずや世界の滅亡に出逢つた樣な絶叫をするであらうが、しかしこの原始民族こそ、文化を衒ふ現代國民、昔日の面影では無いか。況んや性慾、ものに文化もなければ、進歩も無い。戀愛といふ扮裝を除き去れば、名優の妙技も、何等觀客の感嘆に値せぬであらう。然らば道學者の森嚴なる絶叫は、遺憾ながら鬼神が鏡の前に立

つた時に、自分の姿の恐ろしいのに驚くのと何の選ぶ所も無い事になつてしまふ。

思春期とは、人の體内に存在する生殖腺、卽ち男性に於ては睪丸、女性に於ては卵巢が十分に發育して、その司る内分泌機能を完全になし得るに至つた時期である。人は此の内分泌に刺戟せられて性慾を催して來る。之が性慾のありのまゝの姿である。如何に醜くても、一皮剝けば何者も藏して居るものはこんなものである。

之を文藝的に「春の眼ざめ」と云つて居れば、美しい事は美しいけれども、それは性慾そのものゝほんの片鱗に過ぎない。プラトーンの愛と思つて居れば、如何にも高雅で宗教家の氣には入るであらうが、それは性慾の假裝した他處行きのあでやかな俤であつて、無論赤裸々の姿とは云へない。そんな見方は如何に優美でも、如何に高雅でも、畢竟、群盲が象を撫でて、象は柱の如しとか、象は板の樣なものだとか云ひ爭ふのと毫も擇ぶ所の無い愚論に

過ぎないから、假令、惡魔の叫びと罵しられても、それは科學的には價値の少い、或は價値の殆どないものと斷言していゝのである。

○

しかも此の性慾は、中々生やさしい程度のものではない、燎原の火の如くあらゆるものを燒き盡して、死だも辭せずといふに至らしめる。

動物學の書物には、蛸の雄が、雌の爲に殺される危險を冒しながら、雄々しくも交尾せんとして雌に肉迫して行く事や、蜘蛛の雄が、その雌の爲に食殺されるのを意とせずに、勇敢に雌に向つて突進する事等を書いて居る。交尾期の蛙は、その大腦を切取つてしまつても、抱擁してはなさないのを實驗する事が出來る。蟷螂の雄は、抱擁を今世の名殘として、頭も手足も胸も悉くその所か異にする迄に、雌の齒に嚙み切られて、ちり〳〵ばら〳〵になり

ながらも、尾端丈は依然として頑強に――――摯拗に――、雌の身體から離れようとはしないのである。

抱擁を本懷の至りとして、從容として死に就く有樣は、「戀愛は死よりも强し」といふ西諺そのまゝであらう。之は動物界の話である、毫も人間界には緣の無い事であると、知らぬ顏をして居る可く、人類は餘りに多く脛に疵を持ち過ぎては居ないか。

「人類にはそんな覺えは無い」とすまし勿れ、幾百年來日本人が親しんで居て、機械的に諳誦して居る爲に、殆どその意味さへも考へなかつた「小倉百人一首」には、○○○○○○○○○○○歌さへあるではないか。

玉の緒よ絕えなばたえねながらへば

○○○○○

忍ぶることのよはりもぞする

難波江のあしのかりねの一夜ゆゑ
身をつくしてや戀わたるべき

○

王城の鎭護として、京都の東に峙つて、蒲團着て寢たる姿に喩へられた東山、三十六峰の北に連なる比叡の靈峰には、その昔、

白河法皇をして、双六の賽と加茂川の水流と共に、

「朕の意のまゝにならぬもの」の一つであると畏れ多い御嘆聲を洩させ奉つた延暦寺の僧徒が居る。

その不逞な僧徒はやかましい宗門の掟に從つて、未明の三時か四時頃に讀經をしなければならないが、抑へ難い性の惱みを持つて居た。彼等は修業をも怠らず、同時に煩惱をも慰める工夫を凝らして、就眠時間になつてから私に冷やかな床を拔出た、それから海拔八百二十五メートルの地點から、幾里の道を京の花街祇園へ下つて用を辨じ、再び八百二十五メートルの山を登つて、何食はぬ顏をしながら無事に朝の讀經をすますのであつた。

勿論それは誰に賴まれたのでも無い。勿論下山も登山も徒歩であつた。それは今日の樣に叡山にケーブル・カーの出來て居ない時代の話である。今日の僧徒で、先輩の衣鉢を繼いで居るものでも、夜半に遊覽用のケーブル・カーは通はないから、矢張り先輩同樣に、徒歩で上つたり、下つたりして居るであらう。

此の非凡な努力の原動力は何か？

法皇の御意にまで叛く僧徒を、賴まれもせずに動き出させる原動力は、戀を伴ふか、伴はないかわからないが、何れにしても性慾であるに相違無い。是に於て知る、性慾の威力は法皇の命令よりも幾倍强かつたかわからない程に、偉大なものであることを！

その偉大な威力を持てばこそ、人をして死をも辭せずといふ意氣込みを示させるに足るものであることを！

○

小倉百人一首の中にある、中納言敦忠の戀歌に、

逢ひ見ての後の心にくらぶれば
昔はものを思はざりけり

とあるのは、『性的關係を生じて後に於て、始めて從前と比較にならぬ程、戀愛の熱度が高くなつた』といふ意味に解することは出來ないであらうか？！

「初戀」は如何にも可憐な、優雅な、詩のやうに美しいものとして尊敬されるが、それは「處女」に就て既に云つたと同じ意味に於て尊敬されるのであつて、それは決して完成された戀愛史の全編ではない。それは美しければ美しい程、不完全な戀愛史の缺本である。

○

性慾のみの性慾は有るが、戀愛のみの戀愛は無い！

完備した戀愛史の中には、必ず性慾編の一卷が有る！

嗚呼、遙かに望む時、美しい霞が立ちこめて居て、此處こそ醜い性慾を避けて遁世すべき理想鄕であらうと思はれた、戀愛の里も、愈々足を踏み込んで見れば、こゝも亦浮世なりけり」の嘆無きを得ない。性慾を厭ふ法師は、折角杖を曳きながらも、此處に永住は出來ない。

花見んと群れつゝ人の來るのみよ
あたら櫻ののどかにはありける

の歌を書殘して、更に踵を返さなければならない。

さあ！　之から一體何處へ行つたら良いのであらうか？

Naturstudien

同性愛篇

ブロッスは曰つた。『性慾倒錯は、之を未開の國民に發見すること不能であつて、唯々文明國に於てのみ見られる』と。思ふに變態的の性慾は、文明の進展に伴つて之を滿足することの抑壓せられるが爲に、必要に迫られて生じ來つたものであつて、何等の拘束も受けない時代には、此の如き代償を求める程の性的窮乏を見ないのであらう。

私は之から直に、文化と不可分である變態性慾の諸相を摘出しようとするのであるが、その中で日本にも早くから發達して、文學者にまで着眼せられて居た同性愛、就中、男性のそれから始めるのが至當であらうと考へるのである。

上、男性の卷

男性相互間に於ける同性愛、卽ち所謂男色に關しては、餘りに語るべき事實が多過ぎて、到底之を盡すことは出來ない。唯々その要點を逸せざらんことを期すのみである。

男色は種々の原因から、和漢洋の各地に早くから行はれたが、茲には先づ泰西のそれから物語ることにしよう。

「舊約全書」の申命記に『汝、女と寢る如く男と寢る勿れ』とあるのを見れば、猶太には夙に男色の風のあつた事を知るに足る。ギリシヤの全盛時代には、之が公許せられたのみならず、或は奬勵されたのではあるまいかと思はしめる節さへある。卽ち龍陽の契りを結ぶことは、同時に後進の少年の薫陶上必要のものと認めたかの如く、プリユターク英雄傳等に書いてあるが、その中でも最も著しい例はサーモピレーの嶮を扼してペルシヤの大軍を防ぎ、全軍悉く陣歿したレオニダスの一隊と、プラテエーの戰に、ペロピダスを戴いて、マセドニア王フイリップと戰つて死んだテーベの神聖隊とである。大哲ソクラテスが、未だ姦雄になる以前の紅顏の美少年アルキビアデスと一緒に、親しく天幕生活をして居たのは、確に傑作と認めるに足るであらう。少年アルキビアデスが、醜男の哲人を嫌つて家出をすると、哲人は眼の色を變へて探し歩いたもので、アルキビアデスに教養があつたのは全く大哲ソクラ

テスの恩惠である。而してソクラテスが「男色は高尚な美風である」と唱へたのは、甚だ有名な話なのである。

アリストートルは又「男色は人口の增殖を防止する上に必要で、奬勵すべきものである」と唱へたので、三千年後に產兒制限を云々して居る國民としては、此の醫聖の先見の明に敬意を表せずには居られない。

此の如くギリシアに男色が盛んに行はれた原因は、スパルタ教育を强行して、七歲以上の男子を、毎年數ケ月間陣營の中に暮させたが、女子が一人もそこに居なかつたのに關係しては居ないかと推測せられて居る。

○

ローマ帝國の全盛期に、肉體的歡樂に耽ると共に男色の流行した事は、時の文豪マルチアルやヂユヴエナール等の詩に歌はれたばかりで無く、ネロを始めとしてチベリウス、ガルバ、オトー、ネルバ等の帝王が悉くその實行者であつたのでわかる。考證家の說によれば一代の英雄シーザーもオーガスタスも亦何れもその實行者であつたと云ふ位で、その名を一々數へ上ける遑も無い程であるが、ハドリアン帝と美少年の奴隸アンティノースとの戀物語は殊に名高く、後生のフレデリック大王と共に双璧として讚へられて居るのである。

ローマ末期の帝王ヘリオガバラスの如きは、自ら女裝をして愛する男子に玉體を委ねたと傳へられ、大詩人ヴアアジルにも此の嗜好があつた等、列擧の煩に耐へられぬものが有る。

○

中世から文藝復興期にかけては又男色の風が盛んになつた。それは禁慾時代に逢つて冬眠の姿であつたものが、肉の解放の春に惠まれて一しほ鮮かな新綠の芽をふき出した樣に見え

る。詩聖ダンテの「神曲」地獄篇十五章の終りの方に『此の人々みな學深く、譽また高かりしも、地上にて同じ一つの罪に身を穢したり。』とある「一つの罪」は男色の事であるといふが、男色の耽溺者たるタチニーに師事したダンテが、之を筆にした事は何の不思議も無いであらう。

當時の藝術家ではレオナルド・ダ・ビンチにも、ミケランゼロにも、共にその性癖があつたと傳へられ、古典學者にも其人に乏しくなかつたが中にも、フランスのミュレエの如きはパリーで青年の爲に哲學と法理を講義して居る間に不自然の愛に溺れて、獄裡の人となるに至つた。しかも一旦許されてトウルウズの地にローマ法を講ずるや、再び某青年に關係して遂に火刑に處せられかけるに至り、纔に、身を以てイタリーに逃れた位であつた。

○

エリサベス王朝時代にイギリスの才人マアローの作、悲劇「エドワード二世」には王と寵臣との同性愛を描いて居るが、それは架空の話ではない、純然たる身境描寫であつた。卽ち作者のマアローも男色を愛し、モデルのエドワード二世も等しくそれであつた事を、史實が明かに立證して居るのは面白いではないか。又哲人ベーコンに此の性癖のあつた事は、毫も疑ふ餘地が無いとされて居る。

若し夫れその嫌疑のある人を求めるならば、シエクスピーアやバイロンを始めとして、被告は恐らく法廷に入り切らない程あるだらう。卽ち沙翁はその小曲集をして熱烈な言葉を捧げしめて居る美男との關係が怪しいと云はれ、バイロン卿は二十二歳の時に、親しい一青年の爲に遺產の一部を分けようとした事實を指摘せられて居る。それは感情の豐富である詩人の心を理解し得ない、學究達の偏見から來るのであらうと考へるが、しかしそれ等の詩人に

は、女性との濃厚なローマンスが在るといふ事實を擧げて、故に男色に關係無しと辯護するのは無駄である。それは男にも女にも興味を有する、所謂精神的半陰陽の人物も澤山世間に存在するのみならず、前掲のマアローもその一人であるし、ドストエフスキーの『シベリア流刑者の生活』中にも、澤山之が描かれてあるからである。

○

近代になつて頽廢文學の起つてからは、又男色の嗜好者が現はれて來た。「サロメ」の作者として誰も知るイギリスのオスカア・ワイルドはその代表的人物として名高く、醫學的の書物には情人と並んだ彼の寫眞までも掲げられて居るのがある。詩人ヴエルレイヌに至つては美少年アルテユル・ラムボオと親しむや、手を携へて放浪の旅に上り、妻をも、家をも棄て顧みなかつたが、後に少年との間に不和を生じてピストル騒動を起し、之が爲に牢獄に入つ

たものである。

○

然らば現代は如何！？

それは餘り多く語る事が出來ない。唯々一言 Knabenliebe 又は Jünglingsliebe といひ、或は Paederastie といふ文字が、決して古典的の死語でない事丈を明かにして置けばよからうと考へる。

しかしそれでは丸で見當がつかないと攻められるならば、例へば歡樂の都パリーには、春流ゆるやかなセーヌ河の畔にも、華麗なホテルの一室にも、なまめかしい若い男で秋波を客に送るものが居ると云はう。又例へばゴッ〳〵して岩のやうな感じのするベルリンの町には、ボッツダーメル・ストラーセ其他に紅粉をつけたやさ男が澤山居て、來訪の男に媚を呈

しながら酒の相手をして居る家のあることを云はう。尙此事に關してはヘンリー・ド・アルセーユ氏の著書を文明協會で譯して「暗黑面の獨逸」と題した本の第二二三——二二五頁に書いてある。之を以て觀れば昔から氷炭相容れず、將來も亦永久に敵視して相融ける機會の無いであらうと考へられる獨佛の兩國も、此點に於ては全くその趣味を同じくして居るのであつて、男色の風を白哲人種の各國、到る處に見出す事の決して難くない事が暗示せられて居るのではあるまいか。

○

『現代泰西に男色を享樂する人物の居のことは否定しない。しかしそれは大約精神異常者の群である』といふ意見を、チームケは精神病學實函に載せたのであるが、之を見たネッケ教授は又同誌上に、次の如き駁論を揭げたのであつた。卽ち、

『其の事實に關して最も經驗深き有識者が觀察した幾百の男色享樂者中には、毫も精神異常者、又は低能者を發見しなかつた。之が觀察に際しては、その環境に適當の顧慮をしなければならぬ。自分はチームケ博士の說に服する事は出來ない、强て從ふとしても幾分變質的徵候が多い位の事に過ぎないから、博士の議論は病的の材料、しかもその少數のみに就てなされたものと考へるのである』と。

○

亂風といひ、非道といひ、男風といひ、押甎といひ、尾姦といひ、鷄色といひ、鷄姦等といふ男色の異名は、悉く支那に由來するものでないかも知らないが、「金瓶梅」といふ小說にある、

「偏達今日要和レ偏幹二箇後庭花見一」の文字は、女子に對する尾姦の意味であつて、男色の發

達著るしい事を思はしめ、明代の書物には「戀童」、「西域聞見錄」には「妓童」の文字が使はれてあるとか、閩廣地方では少年を「栽尾」と呼ぶとか、支那に於ける男色は單に文字を玩ぶに止まつては居なかつた。「龍陽の契」といふ語源になつた龍陽君の存在のみでも、優に宇内に氣を吐くに足るであらう。

「情史抄」卷下に龍陽君が魏王と船を共にして釣りしながら、泣いて王にかきくどく言葉を「今以二臣之凶惡一、而得三爲レ王拂二枕席一」と書いてあるのは惜い、和文の方がやはらかに聞えると思ふのは漢文を知らない私丈の嘆聲であらうか。「隨園隨筆」卷十八の一節丈は是非、抄出して參考に資せねばならぬ。

國策、鮑註、龍陽君、幸臣也。吳師道正レ之曰、是幸姬、非二幸臣一也。前魚者卽易經宮人貫レ魚之義。魏王令曰、敢進二美人一者族、幸臣無二進理一、美人之稱、非二幸姬一而何。不レ得下以二楚之安陵一爲比、崔鴻十六國春秋、半襲二晉書載記中語一、獨鄭櫻桃則云、是鄭世達家女姬、石虎惑レ之、有二專房之寵一、與二載記云、櫻桃是男寵一不レ合。

○

「石點頭卷」に、蘇州人は「竭先生」といひ、慈谿人は「戲蝦蟆」といひ、江西人は「燻火盆」といふ。南方人は「打蓬々」と呼び、北邊人は「炒茄々」と呼ぶとあるのも亦皆男色の異名ではないか。而して又同書には、

「潼州詞訟十件事到有二九件一、是爲二鷄姦素。」とあつて、支那に於ける其分布の廣大なことを示して居るが、「尙書」にある頑童の記事を見れば、淵源は遠く五千年の昔にあるのだぞと、感服を餘儀なくせしめる慨がある。

「史記」の韓非傳には衞の靈公の彌子瑕を寵することを載せ、「後漢書」の佞幸傳には哀帝が

董賢を愛して常に起臥を同じうしたと書いてある。その他、漢の高祖の籍儒に於ける、或は楚の共王の安陵纏に於ける、或は陳の武帝の陳子高に於ける、或は周の穆王の慈童に於ける等、帝王の尊を以て親しく男色を愛でた記錄も極めて多く、降つて文豪としては唐代の代表的詩人、蘇東坡が美少年の李節を思慕した話等、數へ來れば支那の話か、歐洲の話か、混同してしまふ程、兩者の間に相似點の多いのを認めずには居られない。

○

『宋書、五行志云、男寵起二晉愍寧太康時一、甚二於女色一、是陰陽亂也』といひ、或は、

『五雜俎云、男色之興伊訓、有下比二頑童一之戒上、則知上古已然矣。至レ晉而大盛而、京師男子皆レ體自貨者、唐宋已有レ之矣。』と云ひ、又

『宋、宜和六年、有下賣二青菓一男子上孕而生レ女、又大明周文襄、在二姑蘇一曰、有下報二男子生上子者上公不レ答。但目二諸門子一曰、汝輩愼レ之。近來男色甚二於女一、其必至之勢也』と云ふもの等、悉く宋代に於て特に男色の流行した事を示して居るが、當時詹々外史の書いた「情史」の情外篇に、愈太夫の擬作の疏を作つて、

「奉上帝、欲使章于後庭誕育、可レ廢二婦人一」としたのは、之が男女關係以上に亂脈になつたのを諷したものであらう。

「宋書」卷三十四には、

「男寵大興、甚二於女色一、士大夫、莫レ不レ尙レ之、天下皆相放效。或有下至二夫婦離絶、怨嫉妬忌一者上」として、幾多のヴエルレイヌを生じ、男色の爲に破鏡の嘆を發した妻女の踵出した事を明記して居る。

○

茲に一言の註を加へねばならぬのは、「男色が女色よりも甚だしくなる」といふ事を解し得ない人もあらうかといふ老婆心からであるが、男女間の場合には人目にも附き易く、噂の種とされて萬事に不自由であるのに反し、同性同志であれば誰にも怪しまれる事が無いから、其發展も急速である。加之、情想の異る異性よりも、本統に意氣投合するのは同性であると云はれて居る。殊に男童の好愛せられる期間が極めて短く、恰も櫻の花の盛りが短くて花々しく風に散つて行く風情に、人の心を引きつけるのと同じ樣な趣きが、此の關係を熱烈にさせるに與つて居るといふ。「和漢三才圖會」卷十には、男童を竹の子に喩て之を說明して居るのである。卽ち、

『按、男色甚者勝二於女色一而不レ耐レ久也、若筍之甘美纔過二一旬一則膚硬節高不レ可レ噉也。』

といふのがそれである。

もう一つ言ひたいのは、男色といふ言葉と、女色といふ言葉との關係に就てゞある。吾人はそれ等の言葉に馴れて別に不思議にも思はないが、科學的に見る時これ位不合理であり、又男尊女卑な言葉は無いからである。

「男尊女卑の言葉」とは一寸妙に聞えるであらうが、それは下の如き關係を云ふのであつて、女權論者は須く奮起して此の言葉を撤廢させる必要がある事と思ふ。

何となれば？——

「男色」とは男性の男性に對する關係であるから、若し合理的ならば、「女色」の文字は女性の女性に對する關係でなければならないのに、實際上には女性對女性には他の言葉を用ひて、此の言葉は男性の女性に對する關係に用ひられて居る。卽ち男色、女色共に、男性中心

の用語であつて、單に不合理であり、非科學的であるのみならず、之れ位女性を度外視した、世にも男尊女卑の言葉は無いのである。之を問題とせず「女色」の意義を女性對女性たらしめて、男色のそれに對立せしめるに努力しないならば、女權論者は遂に無神經であるといふ評を甘受せねばなるまい。

○

支那に於ける男色史、特に人の寵遇を恣にした男性の氏名、その日常生活振り、それから男風の流行に伴つて出來た賞罰等に就て、「陔餘叢考」卷四十二に記してある所は最も明瞭で要領を得て居るものと信ずるから、稍々長いけれども左に抄出することにした。四角文字の羅列は、一見堅苦しく感ぜられるが、よく嚙みしめると鯣のやうに何とも云へぬ味が出て來る。之を日本文に改めては氣のぬけたビールの樣になる恐れがあるから、免倒だと云はず

して一通り眼を通して貰ひたいのである。

比二頑童一之訓、見二於尙書一。可レ見三代已有二此風一。後有二彌子瑕、鄧君、龍陽君一、以及二漢之禮孺、閎孺、鄧通、韓嫣、董賢之徒一、至下於傅二脂粉一以爲上媚。

漢惠帝時、黃門侍中皆傅二脂粉一。冲帝時有二飛章一、告二李固胡粉飾レ貌、搔頭弄レ姿。魏曹子建、亦好傅レ粉。晉何晏、動靜自喜、粉白不レ去レ手。唐張昌宗、得レ幸二於武后一、又薦二其兄易之一、傅レ粉施レ朱、俱承二辟陽之寵一。後唐莊宗、嘗自傅レ粉、與二伶人一戲、此皆傅粉故事。

史臣之贊曰、柔曼之傾レ國、非二獨女德一、蓋亦有二男色一焉。癸辛雜識謂、東都盛時、有下以二此圖一衣食者上、政和中立レ法、告二捕男子爲レ娼者一、杖一百、賞錢五十貫。南渡後、吳俗尤盛、自傅二脂粉一、盛二粧飾一、善二指針一、呼謂亦如二婦人一、其爲レ首者、號二師巫行頭一。凡官府有二不男之訟一、則呼使レ驗レ之、敗二壞風俗一、莫二此爲レ甚、云、按此風相習、歷代皆所レ不レ免、然如下宋時

之傳二脂粉一、並有二師巫行頭之類一、則罕矣。

癸辛雜識又記、臨平明因寺、尼刹也。往來僧官每レ至、必呼二尼之少艾者一供レ寢。寺中苦レ之。於レ是專作二一察一、貯下尼之有二逸濫一者上、以供二不時之需一。名曰二尼站一。曾三異同話錄、唐元和中、有二僧文淑者一、聚レ衆論二說內典一、托二言鄙褻之事一、同輩爭爲二歌曲一、呼レ所レ居爲二和尙敎坊一、此皆事之不經者也。

○

歐洲と支那の大體は以上の如くであるとして、扨て我等が祖國、日本のそれは如何であらうか？　彼に比して遜色があるか、無いかを知らなければならないのであるが、幸か不幸か、人語るべき事が甚だ多い。

日本の衆道は、如何なものであつたか？！

我國に特有なる男色の稱呼は、餘り多くないが、同時に多くの人々の餘り耳にしなかつたものもある。

男童を「若衆」と呼び、その名に因んだのであらう、「若道」とも、又「衆道」とも稱するのは、日本特有の稱呼らしく思はれる。衆道の衆は、若衆の衆ではなくて、或は昨今用ひられて居る「大衆文藝」式の衆の儀で、一般向といふ意義から來たものであるかも知れないが、兎も角此の名稱に於て、少くも日本の獨創たることを斷言し得るのである。

「倭訓栞」後編のうちには、「わかしゆ」といふ項に『若衆の義、男色也。衆道などいへり』とあるが、その命名の由來は恐らく「麓の色」卷五の言ふ所が正しいであらう。卽ち曰く、「本朝にては、若道又衆道と稱するは、俗に少年を若衆といふを以て、若衆の道といふの略語なるべし。云々」それから又次の樣に皮つるみといふ稱呼は、それよりも遙に上代に屬し

て居る丈けに、一層耳にしないもので、「北邊隨筆」卷四に次の如く記されて居るのである。

『字治拾遺に、かはつるみといふ事あり。これは男色の事なるべし。つるむとは、今は禽獸などの交はるといふに同じ。この本文、法師の話なれば男色の名らしくおぼゆるなり。これを手銃のことゝいふ人もあれど、さにはあらじ。ある所に祕めらるゝ男色の繪卷物にも、悉く法師の男色をかけるをや。男色の事から國にもふるくありしなり』

右の文中に「手銃」とあるのは、自瀆の義であることを附記して置く。それから最近まで用ひられて居る「オカマ」の語源は明瞭でないが、文化年中に刊行された高田與清の隨筆「松屋筆記」卷一によれば、

無レ限心中藏彌露、灯前一夜淚如レ雨、
他時有レ時レ可レ焦レ恩、鹽竈烟兮松島浦

の詩が「滑稽詩文」の中に載せてあるが、その松島を待つに寄せ、鹽竈を「オカマ」に寄せた偶意的の地名であつて、後世男色を「オカマ」といふ淵源は此處にあるとされて居る。眞僞は保證の限りでないけれども、他の說を知らぬから兎も角も之を揭げて置く。

其他、僧侶間に「大悅」と稱せられて居たのは女色を「天悅」又は「イノ一」と稱するのと對比したのであつて、天悅は卽ち「二人悅」、大悅は「一人悅」の略稱である等の、一部特殊の社會のみに用ひられる稱呼は、一々之を揭げる必要も無いと思ふから省く。

○

日本に於ける男色の起源は諸書に依つて異つて居るが、古い事丈けは確實である。「和事始」卷一によれば、

『我朝にて男色を愛する事、空海法師、渡唐以來の事也と云ひ傳ふれど、續日本紀に、孝謙

天皇の御時、〇〇〇ひそかに侍童にかよへりとあれば、猶その前久しき事にや。或人の云く、破戒の比丘のこの戯れは、弘法以來の事なるべし』と弘法大師が支那の文化を輸入したもの丶如く傳へて居る。

「麓の色」巻五にも亦之を引用した事實を擧げて後、更に異說として次の如く、好色の大家、在原業平を推薦して居るのである。

『或說に在原業平いまだ童形にて、曼荼羅丸といひける時、眞雅僧正戀慕し、和歌をよみて贈り、又業平、伊勢が弟、大門中將こいへると好情ありといへり。然れども其の虛實安定ならず。』

業平の戀物語を記した「伊勢物語」にも亦彼の同性愛を思はせるものがあるけれども、相手は誰とも定められない。卽ち

『昔男、いとうるはしき友ありけり、片時去らず逢ひ思ひけるを、他の國へいきけるを、いと哀れと思ひて別れけり。月日經ておこせる文に、あさましう對面せで月日の經にけること、忘れやし玉ひにけん、と痛く思ひ詫びてなん侍る。世の中の人の心は、めかるれば忘れぬべき物こそあんめれ、といへりければ、詠みてやる。

めかるとも、おもほえなくに忘らるゝ
時しなければ、面かけに立つ。』

又業平、對眞雅の關係に就ては、岡惟中の「消閑雜記」に、眞雅から業平に送つた戀歌として

思ひ出づる常盤の山の岩つゝじ
言はねばこそあれ戀しきものを

の一首を載せて居るから、業平が果して精神的半陰陽者であつたか如何かはわからない。

而して又眞雅僧正は弘法大師の弟であるから、弘法と男色の因緣は、之で又一層濃厚の度を加へて來るのである。

しかし「嚶々筆語」は之等と全く說を異にして、あまり馴染の無い名を擧げて居る。

『小竹祝と天野祝とが交友は、後世の所謂念契にて男色の最初なりしにこそ。

漢土にては頑童を愛でうつくしみて、閨房の色情いみじかりしも、いと上れる代よりの穢行なりしを、皇國の上古にては、さやうな國律神のうらさびは忌ひはてたまひて、萬に高天原の正風の大體にのみ因准したまふことなかりしかば、男色などは其の名目だに無かりし事、大祓の淫穢の罪條に入れられぬにてもいちじるきぞかし。さるを中古以來、外域の穢行にならひて、貴人の御上にすら、公然たる事の聞ゆるぞあさましき。

此の二人の祝の事、何をあかしにて男色とはするぞといはんに、いかなる善友にもあれ、

一人が逢病ひて世を去りたればとて、自れが奉仕る神事をも捨て自殺せむこと、かけてもあるまじきいはれなれば也。尙ほいはゞその死別を悲しむあまりに、同穴の言だてして屍によりそひ自殺したらむさま、全く今の世の男女の情死に同じきぞかし。云々』

猶ほ此の事實の說明に代へて「日本書紀通釋」卷三を抄出して置く。

『阿豆那比之罪。信友云ふ。こは多日、日蝕あり、天下常闇になれるにはあらず。其の時皇后のおはしましける紀伊國わたりにて、數日怪しき雲霧などの深く起り塞がりて、日光を隔てゝ晝も夜の如く暗かりつる由なり、然るは、かたみに別なる神社の祝を、合葬る事を、神の厭惡み給へる故ありて、然る怪氣の起りたりしなるべし（中略）今云ふ、此の二人男色の穢行により、合葬まで せられしを、天野神、小竹神の怒りて、天日を遮り給ひたりしと云へるは、まことにさもあるべく聞えたり』

然るに又北村季吟の「岩つゝじ」には、大伴家持が藏原久須麿を愛したのが、その嚆矢であるとして、「萬葉集」の和歌二首を擧げて居るし、契仲の「萬葉代匠記」にも、亦この兩人の關係と和歌の贈答の事を叙して居る。

更に小山田與清は、「男色考」の中に藤原鎌足に關する事實を指摘して居るが、何れが正しいか、何者も之を確定する事は不可能であらう。

○

起原は兎に角、之が盛になつたのは平安朝からで、盛にしたのは僧侶の力であつた。本居内遠の「賤者考」には、之が女犯を禁ぜられた結果であると論じて居るのは、寧ろ云はずもがなの感を起さしめる位で、寛祐法師、尊意律師、永祿、遍救、覺雅の諸僧都等、詳記すれば際限が無い位であらう。

それから「拾遺集」にある、

あまた見し豐のあかりのもろ人の
君だも物を思はするかな

の歌で推量せらるゝ如く、男色の風は更に在家にも流行して、月卿雲客の心を惱ました事が平安朝の末から源平の時代にまでも及んだのであつた。「鹽尻」卷九によれば○○○が、美童に女裝して黛を畫き、かゝねをつけさせたと記し、又宰相中將信道の挿話、或は關白兼實が平重盛の嫡子維盛に於ける等は何れも名高い。加藤宜樹の「南窓筆記」卷一にある「公家衆齒黑の事」の一節を、この參考に供するのも亦一興ではあるまいか。

「公家衆は十三の歳より齒を染て、十八歳より眉を拂ひ給ふといふ事を、或る神道家の說に齒は骨の餘りなる故、あらはして置くは、神前へ出る時けがらはしきもの故、無禮になると

て染るといへり。是故實を知らぬ說なり。公家の鐵漿を付け給ふ事は鳥羽院より始まれり。よつて古き書には平家物語の敦盛討取の所に見えたり。×××殊の外に男色を御好みなされ、公家衆の子供參內の時、女の如く黑く齒を染め參內せよと仰せられたる事なるを、後々は成人しても付け居る樣になりて、足利時代などは武家に移りて、大身なる者は武家にも黑く付たる事なり。記錄などに靑齒者というてあるは、漿も得付ぬ籤侍の事なり。其時代には靑齒者の首と云を取て、手がらにもならざりし事なり。鳥羽院公家衆の子供、漿付よと御觸の事は、其時代の記錄に出たり。或說のごとく、齒は骨の餘り故はばからば、神拜する手の爪も骨の餘りなり。何色に染むべきや、笑ふにたへたり」

「麓の色」卷五に篇年體に記された男色論は、中々巧であつて是非一見すべき必要がある。

それは澤山名優の出る顏見世の趣がある。

「又平經盛の嫡子、皇后宮亮經正は、その比閑麗の聞えあり。御室御所懸想し給ひ、都落のをりしも餘波ををしみ、兼て經正に賜ひたる靑山といふ琵琶、田舍の塵とならん事、流石に末代の重寶なればいかゞに覺えまゐらする由にて、御所へ返しまゐらせ互に和歌を詠ぜられし事、源平盛衰記に見えたり。經正の弟、音壽丸敦盛、又無双の美童なり。又加茂の長明が、日野の戶山の方丈の室にて友とせし山守の子の童も、實に男色の交り也と云ふ說あり。又源牛若丸美少年の名あり、西塔の辨慶これに愛でて麾下に屬せりといへり。尤も俗說信ずるに足らずといへども、既に新田左中將義貞卿の弟脇屋右兵衞佐、義助朝臣の息男、式部太夫義治は天下に双びなき美童にて、山門の衆徒をはじめ皆人戀慕せる中にも、妙法院の門主、特に心を惱まされ、越路に下向の時甚だ名殘を惜みたまひ、又越前杣山の城主瓜生判官保が弟、義鑑房といふ禪僧、義治に深く執心して忠節を竭せし事、太平記の評に見え

ぬれば、辨慶も義鑑房の類ならんか。又其の日野中納言資朝卿の子息、阿新丸美色あり、後○○○○寵幸し給ふといへり。或は菅阿兒、竹生島の童子、書寫山の乙若、南朝の松帆丸など名だたる美童にして、而も歌舞を善くし、足利尊氏公、松帆丸に重寶の刀を與へしとなん。是れ東鑑に往々見えたる舞童の類なるべし。又足利義持公の近臣、赤松越前守、その比天下第一の美少年也。義持仁清叟の庵に渡御の時、一休越州の手を執りて戯れしといふ說あり。又近代世に鳴りし美童は、織田信長公の扈從森蘭丸、關白秀次の寵臣不破萬作、奥州葛西大崎の領主、木村伊勢守が小姓淺香庄次郎、蒲生飛驒守氏郷の小姓、名古屋山三郎が類也』

此式に集めればいくらも有る。例へば「古事談」の藤原長季の話、「秋夜長物語」にある膽西上人と梅若との契、「古今著聞集」の美童千年の話等、等、等は、あんまりくどくなるから悉く省くが、個人的でない重大且つ深長な關係のある猿樂の事丈けは、どうしても之を

見落すことが出來ないのである。」

將軍足利義滿が美童を近習としたのに端を發して盛大になつた猿樂の鑑賞は、例へば「二水記」に親王、將軍以下公武の諸家が、宮千代丸といふ猿樂役者の美童の色に溺れた事を記し、又「文安田樂能記」に△△△△が福若といふ十七歳の猿樂役者を寵愛した事を記してある樣に、單に足利時代に於ける貴族間に男色を流行せしめたのに止らず、延いて之と全く同一の形式で舞踊と性慾とを打つて一丸としたものを、德川時代の若衆歌舞伎に見出させる基となつたのである。之はくどく解說を加へる迄もない事である。

○

日本に於ける男色の全盛時代は江戸期に在る。蓋し男娼が軒をならべて殆ど公娼の觀を呈したのは、德川時代のみであるが、その陰間茶屋、一名野郎茶屋の狀態は、「人倫訓蒙圖彙」

に次の如く記されて居る。卽ち

『狂言役者や游女屋の女を抱るが如くに抱へ置き、藝を仕入れて十四五にもなれば、それぞれ色づくりて芝居へ出し、藝よく名を取れば我が門口に太筆にて誰が宿と苗字を記し、夜は戸口の掛行燈に名を書きつけ置くなり。まだ舞臺に出ぬを蔭間といひ、他國をまはるを飛子といふ。』

それから蔭間が一人前になつて舞臺に出る樣になれば、之を舞臺子又は色子と呼んだのであつて、西鶴の「男色大觀」に『長き秋の夜を四つ前から呼び立て、明日の舞臺缺けると云ふ、戀の最中に氣の毒ぞかし』とあるのを見れば、彼等の日常は略々推量する事が出來る。實際若衆歌舞伎なるものは、男色の流行を見越して仕組まれた位で、京（京都）では元和三年、江戸では寛永の初年、浪華（大阪）でも亦寛永中に始められたのであつた。

これ等の事が小說としては「男色大觀」の他、烏部山物語、松帆浦物語、嵯峨物語等に描寫せられ、浮世繪としては北尾重政等の彩筆に殘つて居るのみならず、戲文には井尻又九郎の「若道之觀進帳」や、細川玄旨法印の「古今若衆序」があつたり、「西洋雜記」卷一に泰西に於ける男風の歷史を記し、「紅毛雜記」卷二や、「萬國新話」卷四等にも外國に於けるその禁令の事を載せて居る等は、何れも當年に於ける男色流行の盛大を思はせるに足るのである。而して此の男娼を「野郎」又は「冶郎」と呼ぶのは、單に冶は容を整へること、郎は男子の義だといふばかりでなく、李太白の採蓮曲に

若耶溪傍採レ蓮女、　笑隔二荷花一共レ人語、
日照二新粧一水底明、　風飄二香袖一空中擧、
岸上誰家遊冶郎、　三々五々映二垂揚一、

紫驪斷人ニ落花ニ去、　見此躊躇空斷腸

とある遊冶郎の文字から採つたのであると「麓の色」巻五に記す所を見れば、それが有識階級に行はれたものであることを知るに足るであらう。

○

王朝時代の俤を傳へて齒を黑く染め、脂粉を施して、髷は大方島田に結び、幅廣の帶に派手な染色模樣の着物を裝つて居た江戸時代の男娼は、一體何處を根城として活躍したのであるか？

『京にては宮川町、浪華は道頓堀、江戸は禰宜町なりしに、後は葭町、芝神明社邊など、その群の實樓なり、三都の外にはしかずがに衰へて實色はきかず』（賤者考）

『男色樓。芳町を第一とし、木挽町、湯島天神、糀町天神、塗師町、代地、神田花房町、芝神明前、此の七箇所二三十年已前まで樓ありけり。近年は四箇所絶えて、芳町、湯島、神明前のみ殘れり、三四年已前は芳町に百人餘りも有りけるよし』（塵塚談）

「松屋筆記」其他にも類似の事が書いてあるから、時代によつて變化と盛衰はあつたが、大體に於ては定まつて居たのであつて、湯島の藤村屋、加賀屋、三谷屋、津賀屋、千代本等軒をならべて、定紋付の銀簪を頭にして裾模樣に立やの字で、女の樣に裝つた男娼が、定紋付の夜具風呂敷に蒲團を包んだのを、肩にかけた箱屋格の男に送り込まれて、優雅な上野の高僧と戲れて居た所は、蓋し天下の偉觀であつたらう。支那では男色の事を鬼瓦といふ、それは「誠に寢たるその姿、鬼瓦をおしかさねたるに似たり」と「いぬつれ〴〵」に書いてあるけれども、之では誰が見ても鬼瓦等とけなすことは出來まい。（口繪參照）

一口に茶屋といふが、それに部屋と茶屋の區別がある。部屋とは抱へ子の起居する所

で、藤村屋、加賀屋、津の國屋の三軒丈であつたが、後にその區別がなくなつて皆一樣に男娼を置く樣になり、一軒の茶屋で多い所では七、八人、少い所は三、四人位を抱へて居たのであつた。

それから寶暦年中の「風俗七游談」に『先づ舞臺子を上品とす、芳町之に次ぐ・芝の明神麓町、天神・湯島はその次なり。赤城、市ケ谷はその下なり。淺草馬道、本所回向院前を下品とす』とあるのを見れば、之にも隨分下等な代物もあつたに違ひないのである。

○

『一、花山藤之助　年十四
色白にして見つきよく、嘉太夫節語り申候。
一、岩瀧猪三郎　年十六

踊上手、投節うたひ申候。風儀そのまゝ女の中にやはらかに生れつき申候。
一、夢川太六　年十五
酒ぶり幾人樣の御相手にも成り申候。文作三味線よくひき申候。旅子の内では衣裳あつばれきせ申候。
一、松風琴之丞　年十七
影人形よくつかひ申候。この他、口から水を吹き出し、壁に文字を寫し申候。
一、深草甚九郎　年十七
物言ひ、此以前の鈴木平八に生きうつしに候。何も藝なく候。×達者に候。
一、雪山松之助　年十九
野郎なり。座につきたる所、本子と取違ふ程に候』（南水漫游）

之は元祿年中の名高い男娼の評判記であるが、同時に又夢川太六や深草甚九郎の樣にして喜ばれる、年齢表とも見る事が出來る。

男娼の年齢！　それは局外にはつまらない事でも、當事者には隨分、必要で中々論議されたのであらう。楳條軒の「よだれかけ」卷五、男色二倫書の中に、長々しくそれが論じられて居るのである。

『十六歳を若衆の春といふ也。もろこしの人もかく定め侍ればにや、附餘にもしるし書けり。春は盛りの兼言なれば十一より四までをつぼめる花になずらへ、十五より八を盛りの花ときはめ、十九より廿二までを散る花となん定まりし。此ことはりは羅山のとはの言ぐさとてある人はかたりき。又十二より二十までの九年が間を三つにわけて、三世に比し三時の心を數らるゝあり。十二より四までの三年は現在にたとへて主童とかくなり。此三年のうちは、いかにも心うらゝかに持ちて、ひねこび、さかしだたぬを道とせり。是主童の女字の心也。又十五より八までの三年は未來にたとへて殊道と書けり。此三年のうちは見るにつけ、聞につけても皆心をまよはす時にしあれば、心の水をさそひ來るものは多しといへども、淺澤ふかきえにしをよく酌みしりて心の水をにごさず、たゞ情のみちすなほに、いきごみの幽玄なるを道とせり。是殊道の文字の心也。十八より廿までの三年を過去にたとへて主道とかく也。此三年のうちは、如何にもおとなしく互に道を助けて萬の事に過らざるを道とす。これ主道の文字の心也。

此三世をすゞすを若衆の一昔ともいひ、又は一期ともいふ也。また白玉の草子には、七歳より廿五までを若衆の一期とせり。此道を好むものは、三十までをも用ひきにけりとあり。禮記に三十にして室ありとあるを見れば、げにとぞ覺侍れ。云々』

だが簡潔を尊ぶ現代人はこんな長文句を好まない。白線を卷いた高等學校の生徒は、高らかにデカンショ節を唱ふ！

「櫻三月、あやめは五月、コリヤ〳〵

稚兒の盛は十ウ五六、ヨーイ〳〵デカンショ

○

以上に依て已に明であるが、男色と最も關係の深い者は僧侶であつた。一時陣營に起臥する武人の間にも行はれ、又やんごとなき公卿や殿上人の間にも行はれたが、終始一貫した事僧侶の如きは他に無い。僧侶と男色のことは餘りに材料が多過ぎ、且つ風紀に關することを慮つて省かねばならないけれども、次の「三養雜記」卷一の一節のみでも、僧侶が性の煩悶の爲に男色に惱まされたことが、如何に猛烈であつたかは、十二分に明白であらう。

『男色は、もと天理にそむける邪淫にて、在家出家の分ち無く、みないましむべし。佛說に男色を誡むること、すでに法華經、正法念經、十不善業道經、五戒相經、造像功德經、沙彌十戒儀則經、僧護經、阿含摹抄、四分律、五分律、僧祇律、有部律、十誦律など、猶五百問論、瑜伽論にも見えたれど、今は大方をのみあぐ、かゝれば天竺は佛、在世のはるか先より、男色の盛なりしこと思ひやるべし』

○

承應元年、將軍綱吉の時、江戸町奉行は若衆歌舞伎法度を出して、美童の前髮を剃ることを命じ、之を野郎と呼ばしてからは、前髮剃を野郎頭と呼ぶ樣になつた。野郎頭ならば彼等の容色が惡く見える上に、一見してその職業もわかるので、彼等は不體裁を隱す爲に鬘を用ひて女裝したり、茶筅に結んで紫の帽子を戴き、紫の振袖で昔の女形の風をもした。「近

世風俗志」巻下に『今も女形俳優は狹くも月代する故に、必ず額帽子を用ふ。色、紫也。號けて野郎帽子といふ』とあるのを參照するといゝ。

天保の大改革で、水野閣老の斧に依つて表向は茶屋は無い事になつたけれども上野三十六坊と湯島との關係等は勿論、所謂在家でも、例へば俳諧師超波の樣に、色子を呼んで遊んで居た者（假名世説による）の跡を絶たなかつたのは云ふまでもなかつた。

又男娼の無い地方でも男色の風はあつたので、幼少で藝の未熟な陰間を新部子と呼ぶが、此の「へこ」が薩摩の方言で義兄弟の意であることなども、其間の消息を傳へて居るといへよう。明治になつてからも日清、日露兩戰役の中間期の學生間に、此の風が盛であつた事は今尙ほ人の記憶に新しいのである。又明治大正の交に新聞の三面種となつた實例も少くないが、それ等は省いて置く事にせねばならぬのを遺憾とする。

Es zeugt Dein Blick von Liebesglück

下、女性の巻

女性相互間に行はれる性的行爲は、Tribadie とも亦 Saphismus（サフオー淫）とも云ひ、日本では〇〇〇〇と呼んで居る。それ等の方法は二、三以上に上るのみならず、一々詳記し得ないのを遺憾とするが、その一たる Saphismus は、ギリシア古代の女詩人で、名高い同性愛の讃美者たるサフオーの名に因んだものであつて、同女の鄕里レスボス島の名を用ひて、一に又レスビアン・ラヴ

又はレスビアニズムとも云つて居る。

此の現象は、男性が之に無頓着であるのと、男色よりも世間にわかりにくい等の關係から、極めて少いもの丶樣に考へられて居るけれども、事實は男色のそれよりも遙に多くて、クラフトエービングは一萬三千人の女性中の十四人に發見し、某市では六萬人中八十八人以上あつたと云ひ、モルはベルリンの娼婦の二十五%に之を認めて居る。日本でも女學生間にデヤ、オメ、お熱、おはからい、或は御親友等の如き種々の稱呼がある位で、決して等閑視すべからざる社會問題である。

○

之も昔からある事で、瑞典の女王クリスティナ、露國の女王エリザベス、同カザリン二世、或は英國のヘンリー八世の五度目の皇后カザリン・ハワード等は、史上にも有名な人々であ

る。「後選集」に讀人知らずの

いづこにも身をば離れぬ影しあれば
臥す床ごとに獨りやは寢る

といふ歌に、「定めたる女も侍らず、獨り臥しをのみすと、女友達のもとより戯れて侍りければ」と題して居るのを見れば、之も亦それではないかと疑はれ、ラマルテイヌやエルレイヌ等の詩篇と同一の情緒を語るものかと思はれる。

文學的に名高いものでは、デイドロオの著 La Religieuse(修道女) に十八世紀の修道院生活を描いて詳細を極めて居る。バルザックの小説 La Fille aux yeux d'or(こがねの眼の娘) や、ゴオチエの Mademoiselle de Maupin (マドモアズル・ドウ・モオパン) にも之を題材としてある他、ドイツものにはマゾツホの Venus in Pelz 等がある。或はソラの作で名高い

「ナヽ」を始め、モオパツサンやブルゼエ等の作品にも之があると聞いて居る。又西鶴の「一代女」にも之がありはせぬかと云ふ人もある。實例としては鈴木券太郎が其著「女性犯人」の中に擧げて居る女優を弄んだ、群馬縣の一酌婦を見て置かう。

○

クラフトエービングの樣な精神病學者は、これ等の同性愛を先天性のものとし、女性でありながら肩は怒り、乳房は小さく、皮下脂肪は少く、骨盤は狹く、甚だしいのは鬚まであつて、男性に近い者が多いといふ。實際、前に擧げた中にもそれが無いとも言へないので、クリスチイナ女王やエリザベス女皇等が何れも男裝を好まれた點が、千九百一年にニューヨークでムレー・ホールといふ男として死んで、死後始めてそれがマリー・アンダーソンといふスコツトランド生れの女であつた事がわかり、彼女が三十年間男性として米國に住み、二

度結婚して一度は離婚になつたが、二度目は二十年間平穩に同棲して、遂に「妻」の死に終つたなどと同じではないかと詰られると、外國の事ではあり、九重の雲深い邊の話を何とも判斷するに苦しむものである。しかし同時に又その全部が男性そこのけの風采をして先天性の變質者であるとは信じられない、女學校のオメサン騷ぎのヒロインをそんな人であると考へ得ない私は、如何しても後天的の——物足りない性的生活の爲に思ひついた優美な女性をも多數に包含されて居ることを思はずには居られないのである。明治四十四年に○○工學博士の令嬢が、東京府立第二高等女學校の同窓であつて、同い年の××局主事××氏の令嬢と二人で東京からわざ〳〵越後まで出かけ、妙齢二十の蕾の花をむざむざと糸魚川の流れに沈めて、問題を起した事があつたが、それは決して男の樣な女性ではなかつた樣である。

○

云ひ得ない事や、云ひにくい事柄を、巧妙に且つ極めて圓曲に、僅々十七文字の中に躍動させて、江戸の町人が溜飲を下げる道具とした古川柳の中には、この女性同志の愛の殆ど總ての樣式が道破されて居て、それが我が國上流婦人、即ち徳川幕府の大奥に仕へて居た御殿女中の社會に行はれたことを物語つて居るが、それは往年パリーの貴婦人間に、Tribadie が盛に行はれたといふタキシールの說と、丁度符節を合せた觀がある。紙面の關係から類句を此處に擧げられぬのは遺憾であるが、必要の方々は直接原本に就て見られんことを希望するのである。

○

未婚の女性同志が、性質なり境遇なりの共通、或は同病相憐等いろ〳〵の動機から意氣投合して、やがて戀愛以上の關係を結ぶに至る事は之を認めるけれども、性的行爲にうんざりして

居る筈の賣笑婦同志の間に之が多い事は、どうしても腑に落ないと考へる人が少くない。

然り、それは一見矛盾して居るけれども、賣笑婦に多い事實は明白であつて、ロンブロソーは百〇三人中に五人を見出し、バランヅユシヤテレーはフランスの娼婦は二十六乃至三十歳になつて之を始めると云つて居る。日本でも新米の娼妓が、先輩から〇〇〇〇を强られて困つた例も少くない。而してタキシールのフランスの例では既婚婦人間にトリバヂーが多く行はれるといふ事も、同時に併せ考へるべきものであらう。

之に對する深い說明、殊に純醫學的の煩雜な文字を並べるのは止めやう。たゞ平生重苦しい程に綾羅錦繡を着通して居る者が、反つて浴衣がけの心地よさを欲したり、日常珍味佳肴に飽滿して居る人にして、初めて香の物のうまさを解して、茶漬に舌鼓を打つことを云へば十分であらう。剛れては金殿玉樓の起き臥しも有難くなくなつて、夕顏棚の下涼みに男はて

てら、女は二布の氣輕さを垣間見て、羨望に耐へないといふのが人の心の常ではないか。

○

男が男を愛し、女が女に悶える事の、不自然であるのはいふ迄もないが、之が命を絶つ斧と呼ばれる性慾の災から逃れる便法とするに足るか如何か？

或人は男色ならば花柳病の憂が無いと考へて居るけれども、之は大なる誤解である。花柳病は肛門からも人體に入り、又他人にも傳染させることを遠慮しない慮外者である。不自然な受動的の男子に不快な肉體的變化や、疾病を伴ふ事はわざわざ取立てゝいふ迄もあるまい。

同性であれば接近する機會が多くなつて、異性以上に深入する結果は、單に房事過度位では濟まないので、衞を亂したのは彌子瑕であるし、漢高祖が政事に倦み初めたのも籍孺からであつた。其他鄧通や董賢等、男色の爲に一國を失はしめたものゝ多いのを見れば、傾城と

いひ傾國といふ言葉は決して異性に對する時にのみ用ふべきものでない事が明白であらう。所謂同性愛は異性に於ける場合の弊害のすべてを悉く包含して居るものであつて、決して之を性慾の桎梏から逃れ得べき活路と考へることは出來ない。即ち弊害が普通以上に多いのと、不自然であるのとの他には、毫も選ぶ所の無いものと云はなければならない。

○

先天的の精神異常があつて、同性に思を焦がすものは論外である。宗教や道德等の規矩を遵守して、仙人の樣に行ひすまして居る樣な顏をしなければならないが、抑へ切れない性慾を鎭壓する爲には同性愛が必要だといふ僞聖人は問ふ必要がないけれども、それ以外の人々に於て同性愛を考へるのは愚である。同性愛に陷る必要は少しも無い、それよりは異性に親しむ方が自然である。自然を排して不自然を禮讚すべき理由は無い。異性と語ることを恥な

から、同性に狂つて僅にその悶々を醫しつゝ、自らやましくないと思つて居るならば、それこそ氣の毒千萬な自己暗示ではないか。

若し又歡樂の極みを盡した擧句、獵奇的に怪異を求めて同性愛に耽るならば、それは横暴不逞の徒の贅澤三昧であつて、我等の共に語るを潔しとせざる所である。

強烈なる性慾の桎梏から逃れる路は、どうしても之を他に求めなければならない。若し同性愛の路を辿れば、嘗て東西の古人が踏み迷つた行きづまりの穴倉に、結局頭を打つけるの愚を繰返すに定まつて居るのである。

さらば我等は、何處にその活路を求むべきか?!

自瀆篇

114 術 性 國

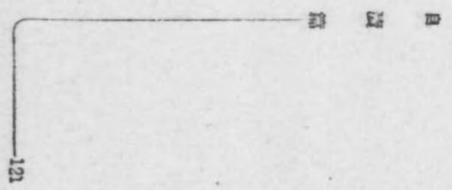
115 說 說 目 6

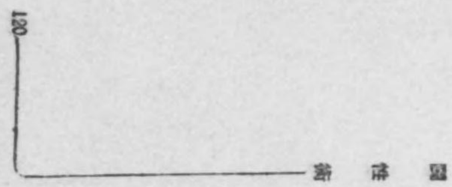
目錄 ——— 117

國性術 ——— 119

118 [illegible] [illegible] [illegible]

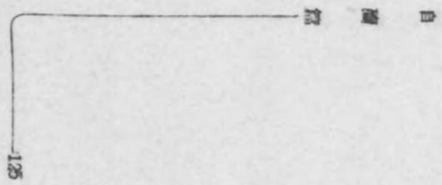
119 [illegible] [illegible] [illegible]

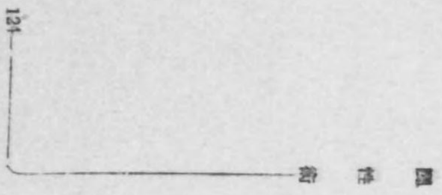

121
121
121


120
120

122 備 性 國

123 建 設 國


125
四
棵
松


124
四
棵
柳

同性戀 126

變態性慾篇

變態性慾篇 127

圖書館學概論 129
圖書館學概論 142

圖 [illegible]

120

圖 [illegible]

121

圖 佳 蔚 132

圖 佳 佳 佳 佳 125

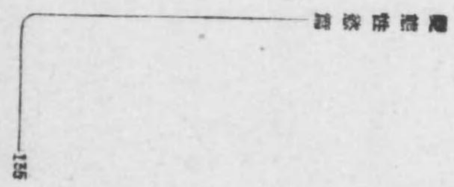

134
135

圖 目 錄

136 ——— 表 格

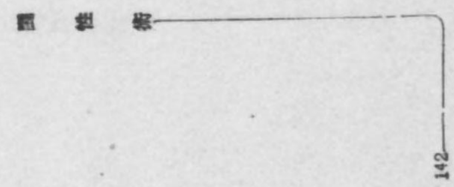
137 ——— 圖 形 索 引

國 佳 術 138

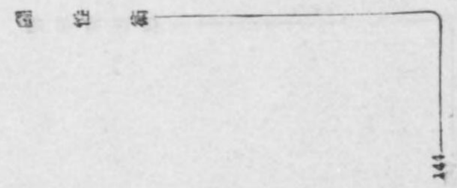
國 佳 術 · 歌 詩 139

140 國 体。 尊

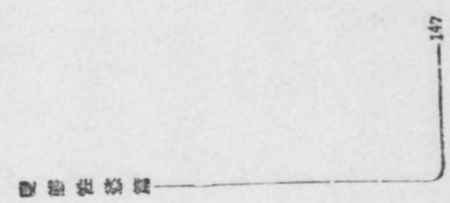
141 恩 徳 体 校 尊

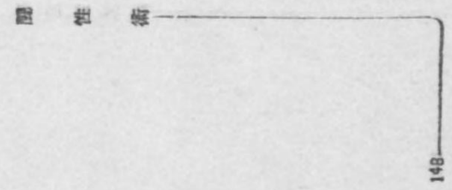

142
國性術

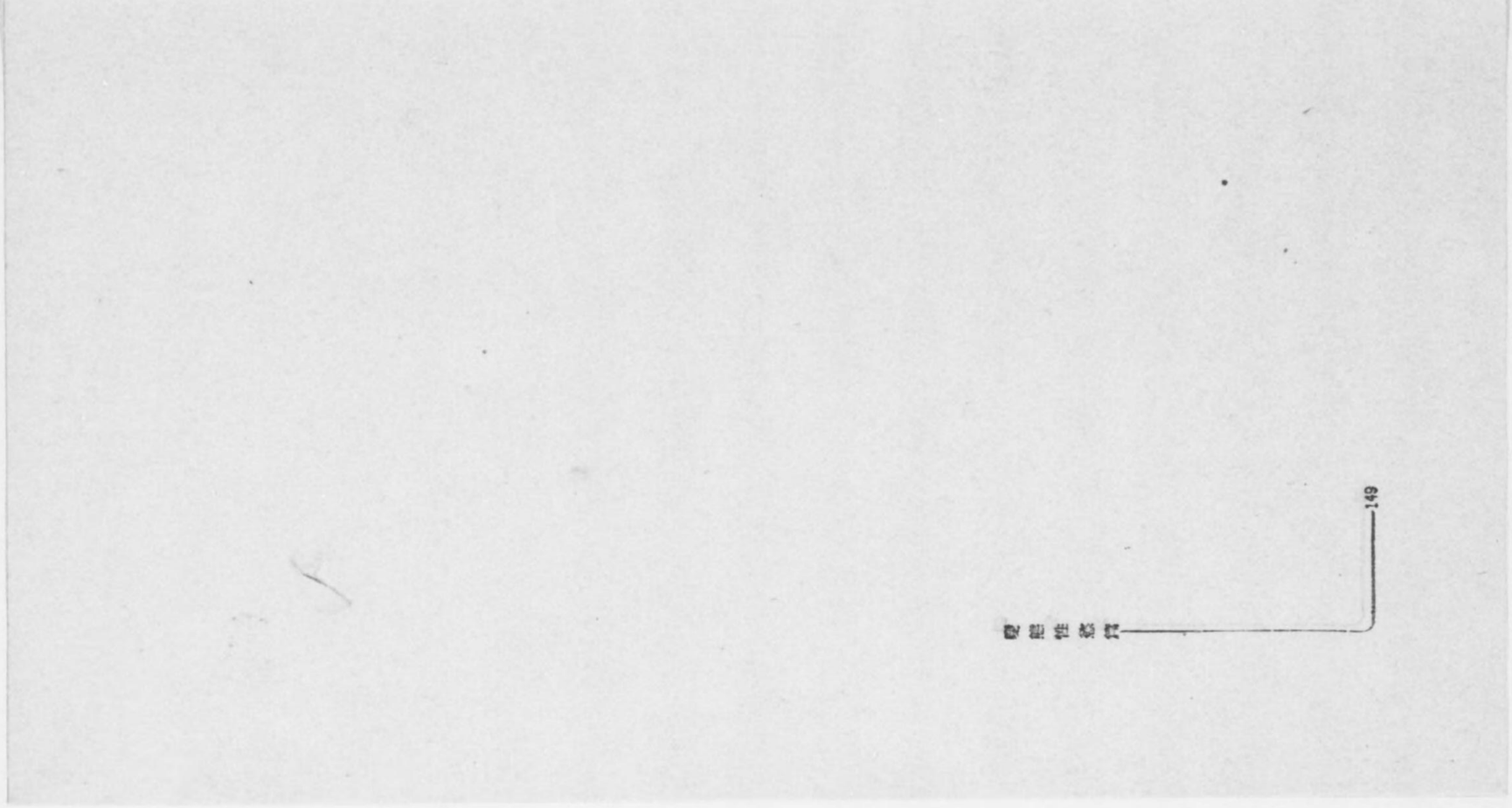
變態性軟體 —— 145


441
銅 炉 図

吸能性芯層 145


147

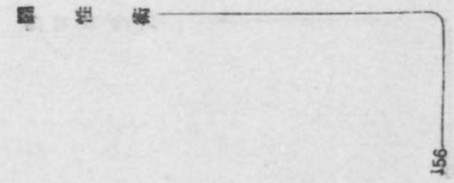

隨性術
14B


電能性能代
149

國性術 150

國性術 152

關性振 151


圓性編
156

■ 能性校園 157

國性銅 153

國語課本 160

國語課本 161